

底本の方が音が通じ易い。海は丹壑は池底(底)の聲はひらけた谷の意。壑は谷の意。別字である。むしろ經と同字體のC(三)G(一)H(一)I(一)J(一)等の間に轉縁關係がないが等の興味が出てくる。海は海と碑の違ひ輝字はC(一)E(二)本と後のPも用いている等、今回は詳述は避けるが興味を盡さない。二玄社の影印本が容易に入手できる。

○B 池底叢書「百廿詠」(宮内廳書陵部藏「池底」より下字體を異にする合せ本。「百詠和歌」の和歌のみと載せる。傍訓、聲點、返點、ヲコト點が見える。合せ本といえ貴重なる古本。別表の異同例七十八例中底本と一致する本文七十三例(83%)。以下次の數式にて示す。B A 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

○C 成實堂文庫本「李崎雜詠百廿首」(石川文也「華業財圖」お茶の水圖書館「成實」存卷上日(一)卷60)途中石(二)の第5句より原(原)の第四句まで缺。張庭芳の序あり。鎌倉期寫本。64(81%) (缺句があるので68という數字を分母とする)。法解における校異は省略。別表參照。圖書重美三十一

○D 明刊本「文苑英華」山卷五五(石)石卷(六)海卷(三)北京中華書局一九六六影印本)。この影印本は宋本に明刊本を補配したものであるが、當該部は明刊本であり、雙行の校異は明刊本に存す。A(一)C等の古本に比してすでに異同が甚しい。19(28%) 尚この書は北宋の雍熙三年(九八六)に完成。南宋の嘉泰四年(一一一四)に再刻されるまで二度の校定を經ている。明版は隆慶元年(一五六七)成書。萬曆年間(一五七三—一六二〇)にも補修刊行されている。したがって明版の本書は「唐詩二十一家詩」中の「李崎集」(明嘉靖三十三年(一五五四)刊)あるいは「唐詩紀」中の「李崎集」(明萬曆十三年(一六一五)刊)が、その雙行法の校異に用いられに可能性がある。

山(三)「禮」(D)と同じ本文を「唐詩紀」(七)も持つことがその證左とせらう。

○E 陽明文庫藏「李崎雜詠百廿首」(陽明A(二))。72(92%)。次(F)の佚存叢書本と近縁關係を示す本文がある。石(三)初實(A(一)B(一)G(一))初實(D(一)H(一))に對して初落(E(一))。原(關A(一)J(一))に對して開(E(一))。江(一)流似(A(一)J(一))に對して瀬似(E(一))の例が見られる。略に未筆の法記あり。江戸時代寫。圖書近リセ

○F 佚存叢書「李崎雜詠」(佚存寛政享和(一)七九一(一八〇三)間成立。70(87%) 版本としては最も新しい年代の成立であるが、本文は故態を止めぬ。本文は古本各種を以て校訂したものらしい。

○G 慶應義塾大學圖書館藏「百廿詠詩注上下」(張注)。唐張庭芳の序と注。傍訓、欄外注等と有す。天理大學圖書館本は後世の注がまま見られるが、完本として最も故態を止めぬ善本である。傍訓類は江戸前期のものであろう。68(87%)。

○H 内閣文庫藏「李崎百詠」、内題「百廿詠」(慶長)慶長頃寫本。「百詠和歌注」の底本。まに翻字。

71(78)(90)。河ふ桃花を桃華(HJ)とし、洛な錫瑞を賜瑞(HI)とする。圖番特四二四七九

○I 淺草文庫本「李嶠百廿詠」上下全。内題「百廿詠」(内閣文庫藏)「淺草」。江戸時代寫。傍訓返點あり。

唐詩紀さいしけ「全唐詩」との校異を傍記する。71(78)(90)

○J 陽明文庫藏「李嶠雜詠」(陽明B丙)。聲點、マナト點あり。江戸時代寫。圖番 近リハ

右十本は傳藏藏宸翰本系の古本系本文。池底叢書本、陽明A乙、慶長本、淺草本、陽明B丙本が信頼度の高い本文といえる。伏存叢書本も参考にする(本文である。張注本は注釋研究として貴重である。

○K 「唐詩二十六家 李嶠集三卷」(内閣文庫藏)「二十六」。明嘉靖三十二年(一五五四)序刊。黃氏淳玉山房刊。これより前に「唐百家詩 李嶠集三 嘉靖十九(一五四〇)序刊本があるが、ほぼ同系本文。次の「唐詩紀」本と一致する本文を持つ。全唐詩本とも關係ある本文を持つが、直接の祖本ではない。

○L 「唐詩紀」二十六、李嶠二(吳琯編、陸弼校)「唐詩紀」明萬曆十三年(一五六五)序刊本。内閣文庫等に藏する他、屈萬里、劉北祐編「全唐詩稿本七」(聯經出版事業公司の影印本)がある。この集が「全唐詩」の李嶠集の底本と考えられる。原々「迥(はるか)と迥(めぐ)の兩本文があるが、二十六家本(K)は板であるが本集以下は版である。因り、本集以下諸集は迥とする。野にも同。野の板菜と版菜、二十六家本(K)は板であるが本集以下は版である。因り、は鳳吟と鳳吟、二十六家本は鳳吟、本集以下は鳳吟である。江の清如(K)に對して清從(L)以下である。これらの例から本集が「全唐詩」の底本であることは明白である。注解の校異には採用せず、別表を參照。

○M 「全唐詩」(全唐)。清聖祖勅編康熙四十六年(一七〇七)序刊(殿版)第三函第一冊(李嶠三)復興書局影印本。「御定全唐詩」卷五十九(3a)四三冊四庫全書影印本)。同石印本卷三李嶠三(3b)復興書局影印本)。

○N 陽明文庫藏「唐李嶠雜詠」上下「陽明C甲」。江戸時代寫。傍訓、聲點等なし。全唐詩本を底本とする。圖番 近リハ

○O 「和李白雜詠百二十詠」(正徳三年(一七一一)伊藤長胤跋刊本(内閣文庫藏)「和李白」)。公辨(一六六九)文九「一七二六享保元」)。元祿五年(一六九二)東叡山(上野寛永寺)において八海より灌頂を受く。同六年天口座主。寶永四年(一七〇七)座主を辭して東叡山に居住中の正徳三年に好古、景暉等近侍の僧と全唐詩本の「百二十詠」に和して作詩した。韻々李嶠百二十詠に合せている(和韻)。

○P 「李巨山詠物詩」(寶曆十一年(一七六一)序大坂吉文字屋市兵衛刊本。汲古書院影印)「李巨」)。石川

貞點校本。本文の校異は頭注に示す。全唐詩系の本文であるが、特異な部分もある。原は、河原、は、全唐詩系の本文に脱落しているが、諸本に見られぬ語を以て補っている。

○Q「李嶠詠物詩解」①詩解 天明三年（一七八三）自筆本。靜嘉堂文庫藏。戸崎允明著。全唐詩系の本文を持ち、延寶三年（一六七三）版本等にて校定した混成本文を持つ。注解に努めているが、必ずしも張注を越える程のものではない。

以上二十六年本以下詩解本（K、Q）までは全唐詩系の本文である。いずれも善本とはいえず古本系のA、Jの善本を以て底本とすべきである。續稿は池底叢書本を底本にした。

○「百詠和歌」源光行作上下（内閣文庫藏）圖番三三五九 江戸時代寫。かつて「百詠和歌法」（汲古書院）に影印したものを翻字する。

ニ注解に用いた資料について

○イ類書類 『藝文類聚』（唐歐陽詢撰、汪紹楹校、中華書局一九六五）。宋紹興版の影印本があるが、必要に應じて参照した。『初學字記』（唐徐堅撰、底本清古香齋本、中華書局一九六三）。これも宋本の影印本があるが、藝文類聚に準ず。『白氏六帖事類集』（唐白居易撰、陸心源舊藏、靜嘉堂文庫藏、宋本影印本二冊、新興書局一九六九）。『太平御覽』（北宋李昉等撰、影宋本四冊、中華書局一九六〇）。『淵鑑類函』（康熙四十九年十月十五日（一七一〇）序刊殿版影印本、新興書局一九七八）。『新刊校正圓機活法詩學全書』（明王世貞校、菊池東句點明曆二年（一六五五）刊本）。『分類字錦』（康熙三十七年（一七〇二）陳邦彦序刊本）。

類書類は寶用書であるとともに、それぞれの時代の文化水準を知るに大切な書物である。また、今に散佚した書も多く傳えており、これに基き成書したいわゆる輯佚書も多い。また、詩文の作法書として重要な意味を持つ。詩文を作るといふことは寶用であり、アカデミズムではない。『分類字錦』や『圓機活法』等は、『和李嶠百字詠』の作者達にとって便利なものであり、大部な十三經類をひもとく作詩したと考えられない。唐の李嶠にとつても『藝文類聚』や『修文殿御覽』の如き先行の類書に貴重な情報源であった。ただし、洋装活字本は簡便であるが、原本は極めて大部なものであり、今は消失したより簡便な作法書（憶中できる）が使われたと考えられるが、寶用書は消滅する運命にあるのです。散佚したのも少なくない。

○ロ十三經 『古法十三經』上下（新興書局一九六四）。『十三經注疏』（阮元校影印上下、文化圖書公司一九七〇）。

○ハ二十五史 『百衲本二十四史』（四部叢刊、商務印書館一九三三）。『續句二十五史』（底本は武英殿刊本を中心、藝文印

書館刊の注疏本三十五史に標點を加えたもの、新文豊出版公司一九七五。「二十四史」(標點を加えたもの、中華書局一九五九—一九七四)。「和刻本正史」(汲古書院)。

○三「四部叢刊」(商務印書館一九一九)。「四部叢刊續編」(一九七六)。洋裝本は線裝本と編成を異にする。
○ホ「叢書集成新編」(新文豊出版公司一九八五)同續編(一九八九)。この近代編輯の叢書の底本は唐代の詩を考證するには必ずしも善本ばかりとはいえない。四部叢刊本の方が良い。右の外多くの本を用いたが省略。

○ハ「文選」。「和刻本文選」(李善注、京都大學人文科總字研究所の「文選索引」の底本)。「和刻本文選」(慶安五年(一六五三)刊本の影印本。六臣注あり。汲古書院一九七四—七五)。「四部叢刊本六臣注、古活本六臣注、足利本六臣注」等。五臣法も影印されている。

○ト「光泰漢魏晉南北朝詩」上中下(中華書局一九八三)。
○チ「全唐文」(十一冊中華書局一九八三)。
○リ「中國歴史地圖集」(譚其驤編中國社會科學院八冊、香港三聯書店一九九一、繁體字版)。
○ヌ「水經注」後魏酈道元注、楊守敬熊會貞疏「水經注疏」上中下(江蘇古籍出版社一九八九)。玉園雜校「水

經注校」(上海人民出版社一九八四)。

凡例

- 一 底本 傳誥藏天皇家翰「李嶠詩殘卷」(東山御文庫藏、二玄社刊)
- 二 百廿詠本文 讀み下し文「和季嶠百二十詠」讀み下し文
- 三 枚異 十五本による對校表。
- 四 注解 簡略な本文の解と注。注は紙数を減少させるための返點傍訓を施した。
- 五 注解の後に「百詠和歌」(内閣文庫藏)を翻字した。
- 六 「和季嶠百二十詠」の注を補注として末尾に附した。
- 七 末尾に慶長本「李嶠百詠」(日)と四庫全書本「全唐詩」の「李嶠集」の坤儀部を影印した。

坤儀十首目錄

- 十一山、十二石、十三原、十四野、十五田、十六道、十七海、十八江、十九河、二十洛

8.3	8.2	8.1	7.3	7.2	7.1	6.3	6.2	6.1	5.3	5.2	5.1	4.3	4.2	4.1	3.3	3.2	3.1	2.3	2.2	2.1	山	
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	嵯峨
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	池底
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	英華
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	陽A
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	陽B
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	伏
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	存
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	張注
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	慶長
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	淺草
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	陽B丙
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	二十六家
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	全唐
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	陽C甲
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	和
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	李
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	李巨
茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	茗	詩解

四夷布（張注引孫興公《緯賦》。文選。十一。九。初刻本）。王歆之《神境記》「九疑、是舜之葬處也。

此山之表復有三峯。高於諸山頂。有飛泉如帶。（太平御覽四十二。九疑山。）。○4 峯上半天

雲。峯の中空に雲がわき昇る。○半天雲は中空に出た雲。『辛氏三秦記』「華山在長安東

二百里。不知幾千仞如半天雲。（張注。太平御覽三十九。華山。）。○5 古壁丹青色。古い

壁には丹青の色が残っている。○古壁。古い巖壁あるいは古いかべ。後者か。李嶠と同じ頃の

人陳子昂（六六一—七〇二）。「詠主人壁上書鶴寄奇主簿崔著作」。「古壁仙人畫。丹青尚有文。

獨舞紛如雲。孤飛暖似雲。自矜彩色重。寧憶故池羣。」（全唐詩三十四。）。丹青は繪の具。

上の詩參照。○6 新花錦繡文。古壁に新しく彩色された花は錦繡のようであてやかな

いらどろ。錦繡は花がどろどろに咲いた様子をもいさの織物に喩えたもの。『宋本方輿勝覽』

「錦繡谷。廬山記。奇花異草不可殫述。三四月間。紅紫匝地。如錦繡故名。」（上海古籍。七。七。）

叢新（注）。引錦繡谷舊錄。草堂記「春有錦繡谷花。夏有石門澗雲。秋有虎谿月。冬有廬

峯雲。」（白居易集箋校四三。初。の上海古籍）。唐。盧照鄰（前朝）「文翁講堂詩」錦里滄中館。岷山稷下

亭。空梁無燕雀。古壁有丹青。槐花落猶疑。中。苔深不辨銘。（全唐詩三三。）。故事は漢書

列傳李九列傳李九循吏文翁傳に見えろ。唐。章孝標（前朝）「破山水屏風」一作姚合詩「時人嫌古畫。

儻壁不曾收。雨滴膠山斷。風吹絹海秋。殘雲飛屐裏。片水落林頭。尚勝花鳥。君能補

綴休。（全唐詩六六。）。○7 已開封禪處。めでたい太平の世となり、もう封禪の地は開

かれています。封禪は天子が天命を受けて位に即くと、天の神と地の神を祭ること。『史記』三八封

禪書（注）正義曰此泰山上築土為壇以祭天報天之功。故曰封。此泰山下小山上際地。

報地之功。故曰禪。言禪者、神_レ之也。白虎通云、或曰封者、金泥銀繩。或曰石泥金繩。封_レ之_レ以_レ印_レ爾_レ也。五經通義云、封_レ姓_レ而王_レ致_レ太_レ車_レ必_レ封_レ泰_レ山_レ禪_レ梁_レ父_レ荷_レ天命_レ以_レ爲_レ王_レ。使_レ理_レ羣_レ生_レ去_レ以_レ入_レ乎_レ於_レ天_レ報_レ羣_レ神_レ之_レ功_レ。〔標點本(4)〕。『述征記』「華山對河東首陽山。黃河流于二山之間。云一本一山。巨靈所開。今踏手跡於華岳而脚跡在首陽山下。〔藝七華山(2)〕。張注引『述征記』。〇八希謁聖明君。どうや聖君子に拜謁したい。「華山已開求請聖君封禪」(張注)。張注においては華山における封禪を考えているようであるが、華山における例未詳。泰山において行われるのが歴代の慣習。「詩解」の注においては、『管子』、『白虎通』等と引證す。『史記』封禪書に詳細な記述が見られる外に、『藝文類聚』三十九、封禪。『初學記』三、封禪。『太平御覽』五三六、封禪等類書類に詳しい。ただし、次の例は参考に値する。晉・傅玄「華岳銘序」「若夫太華之爲鎮也、五岳列位而存其首、三條分力而處其中、故能參兩儀、以比德、是以古先歷代聖帝明王、莫不燔柴加牲、尊而祀焉。於虞書、則西巡狩至于西岳、而親祭焉、於禮、則太司馬掌其分域、而大宗伯典其禮祀也。〔藝七華山(2)〕」。

百詠和歌

山 古壁丹青色 古壁におひたる苔 文彩ありと云う 山水の景色を壁の繪にかけるあり
章孝標詠云 雨滴膠山斷 風吹絹象秋 也

あき山のこすゑはやすくうつしけりしかのねのみぞ筆いまかせぬ

己開封禪處 希謁聖明君 花岳は黃河の東に對へり 首陽山は神靈のひらく所也
手の跡花山にあり 足のあと首山に有いまいのこれり 花山已開求請聖君封禪

8.	7.	7.	7.	6.	6.	6.	5.	5.	5.	4.	4.	4.	3.	3.	3.	2.	2.	1.	石
字須	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	嶺
寧復	補極	持	僅因	早歸	鷺	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	池底
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	英華
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	陽A
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	已佚
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	存
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	張注
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	慶長
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	茂草
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	陽B
寧復	補極	持	僅因	早歸	鷺	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	西
寧復	補極	持	僅因	早歸	鷺	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	三六
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	家
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	全唐
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	陽C
寧復	補極	持	僅因	早歸	鷺	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	和
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	李
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	巨
寧復	補極	持	僅因	早歸	燕	過湘	初實	星	入宋	飛	錦中	雲葉	發	鏡裏	巖花	飲羽	將軍	固	詩解

石	嶮	嶮	池	底	茨	華	陽	(乙)	硤	存	張	注	慶	長	淺	草	陽	日	酉	子	家	全	唐	陽	(甲)	和	李	李	巨	詩	解
支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機	支	機
想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	想	

○51「初本作已非(李巨頭注。延寶版本頭注缺非字)。「延寶版本頭注落(詩解)」。○52「一作禮(詩紀)」。○53「想字詩紀作羨。「延寶版本羨作想」(詩解)。

注解

○1宗子維城固 宗子は城のようにな強固を衛り。宗子は本家を嗣ぐ子。毛詩十七大雅板「懷德維寧。宗子維城。」注「懷、和也。箋云、和、女德、無行、酷虐之政。以妾女圍。以是為宗子之城。使免於難。」(鄭玄注古法毛詩十七。張注)。維城は強固な城のようにな國の衛りとなる者の喻え。『漢書』四文帝紀「高皇帝王子弟、地、犬牙相制、所謂盤石之宗也。」(注)即古曰「犬牙言地形如犬之牙交相入也」(標點本)の張注、同文、史記十孝文本紀仍(參照)。○2將軍飲羽威 將軍のうは石をも射抜く威力あり。漢飛將軍李廣の故事。蒙求「李廣成蹊」においても知られる。『漢書』五十四李廣傳「廣出獵、見草中石、以為虎而射之、中石没矢、視之石也。他日射之、終不能入矣。」(標點本)張注。飲羽の故事は次に見る。『韓詩外傳』「楚熊渠子夜行、見覆石、以為伏虎、彎弓而射之、没金飲羽、下視、知其石也。因復射之、矢摧無迹。漢書載李廣亦如之(藝文石)」。初五石、飲羽、四叢(六十四)。

○3巖花鏡裏發 巖壁に咲く花は石鏡に映じて發く。鏡裏發とは巖壁に咲く花が石をみかいた鏡に映ることをいう。漢楊雄蜀王本紀「武都大夫化為女、顏色美好、蓋山精也。

蜀王鑿以為夫人。無幾物故。蜀王於武都檜上。於成都葬之。蓋地三畝。號曰武檜。以石作鏡
下板。表其墓。藝七十鏡。初五石蜀鏡也。北周庾信「尋周處士弘讓詩」石鏡菱花發。桐
門琴曲愁。北周詩四下。藝三十六。隱逸作梁度有各詩。張注同。庾信「梁東宮行雨山銘」山
名行雨。地異陽臺。樹入床前。山來鏡裏。藝七總載山。文苑英華七三。作「山銘」行
雨。樹入林頭。花來鏡裏。庾信「鏡賦」臨水則池中月出。照日則壁上菱生。藝七十
鏡。全周文九。晉張僧監「尋陽記」石鏡山東有一石懸崖。明淨照見人形。初五總載
山石鏡。○云葉錦中飛。雲が錦の織物の中で舞い飛ぶ。雲葉は雲をいう。「雲
有金柯玉葉。有錦石山又出雲。」張注。あるいは雲を錦のぬいとりにしたもの。雲錦
をいう。「王子年拾遺記」「孺支國人時來獻真。有列煤鏡。文似雲霞。覆以日月。如城雉樓
樓也。」初學記の本文に缺落あるが、兩者相補うものあり。唐太宗皇帝「秋月即目詩」「散
飄雲葉。迷路飛煙鴻。」文苑英華七。晉成公綏「雲賦」或繡文錦章。依微雲初。
藝二。雲。全晉文九。○入宋呈初賈。宋の國に隕石が初めて落ちた。春秋時
代の宋は河南省商丘に都した。この地に賈賈石が落ちたという。「春秋經傳集解」僖公中六
「經。十有六年。春。王正月。戊申朔。隕石于宋。」杜氏注「隕。落也。聞其隕。視之。石數之
五。傳十六年。春。隕石于宋。」隕。星也。杜氏注「但言星。則嫌星使石隕。故重言隕星。」
古注六。張注。○過湘燕早歸。石燕が湘水を過りていそいで歸ってくる。湘は
湘水。湖南省零陵縣の西に至りて瀟水を合せて瀟湘という。燕は零陵の石燕。晉顧凱之

「啓蒙記」零陵郡有石燕得風雨則飛如真燕(初立石零陵燕108)。隋虞茂賦得詠石

詩「蜀門鬱阻地遠參差鏡峯合月魄素顏通雲枝(初立石110 隋詩627)」風俗

記「湘川零陵有石燕過雨則飛過也(張注)」湘中記「零陵有石燕形似燕得

雷風則飛頡頏如真燕(藝文五燕107)。〇7儻因持補極かりそめに女媧の天極の

補修の手助けをするより。補極とは昔女媧氏が五色の石をもって天の破れたとこ

ろを補修し、整龍の足をもつて四極を立てたという故事による。淮南子六廣冥訓「往古之時

四極廢尤州裂裂分也天不兼覆陸不周載於是女媧鍊五色石以補蒼天略斷整龍足

以立四極(注整龍太龜天廢頡頏以整足柱之)四叢(66)。補極は補天立極の意。蒙求

449「女媧補天」はこれによる。帝王世紀「女媧鍊鍊五色石以補天之闕(張注)」8寧

須相心支機むしろ織女の支機石の傳説を想うべきだ。支機は天の織女の機を支える石。龜

田鵬齋「舊法家求」博望尋河前漢張騫奉使西域目窮河源武帝封為博望侯

遂得支機石歸(上石注に詳細な考證あり)。陳陰鏗「詠石詩」天漢支機能仙嶺博

茶餘零陵舊是燕昆池本學魚「藝文石109」。「事已見星詩注」織女以石支機(張注)。

百詠和歌

石巖花鏡裏發武都大夫化してそんまの身とせりすかたがたち世に勝れたりけれ

ば蜀王のささとなりぬ其後ひさしからすして命終りにけり武擔山の上にはふりて

其前に石の鏡をかけたなり。鏡の中はいはほの花うつるといへり石中花花發

むかしみしにほひはいつら鏡山いはねの花のかけはかりして

○五、一本作「肥美」自「肥美」爲「可也」(陽A)。○六、每按、唐詩紀作「暮若」開作「關」。
關、肥美二字、今共依「延寶」版本記之(「詩解」)。

注解

○ノ王粲銷憂日 魏の王粲は「登樓賦」を作り、西京(長安)の亂を避けて憂々暗とした日。「登樓賦」

王仲宣(注)善曰魏志曰王粲字仲宣、小陽人、獻帝西遷、粲從至長安、良曰時董卓

作亂、仲宣避難、荆州、依劉表、遂登江陵城樓、因懷歸而有此作、述其進退危懼之情也。

(本文)登、爲樓、以四望兮。聊、暇作暇。日以銷憂。馮、漸、以遙望兮。向北風而歸襟、平

原遠而極目兮。蔽荆山之高岑、路逶迤而脩迥兮。川既美而濟源、(注)善曰、邊讓章

華臺賦曰、冀、彌日、以銷憂、漢書東方朔曰、銷、憂者、莫若酒。善曰、爾雅曰、迥、遠也。

(和刻本文選上)の、表注。詩解。○二、江淹起恨年、江淹が恨に伏して死んだ人を念ひ、

賦を作った年。「恨賦」江文通(注)善曰、劉播、深典曰、江淹字、文通、濟陽人也。六歲能

屬詩、及長、愛奇尚異、翰曰、嘗謂、古人遭時所感、有志不申、而作是賦也。(本文)

試、玄乎原、蔓草繁骨、(注)略之。人生到此、天道冥論、(注)略之。於是僕本恨

人心、驚不已。直念古者、伏恨而死。(注)濟曰、僕者、淹自稱也。恨人恨心不、就也。復

念、古人有、如我、恨而、死、者、將、述、之。(和刻本文選上)の、張注。詩解。○三、帶川遙

綺錯、遙かに川をめぐって百花爛漫。綺錯は美しく入りまじること。魏何晏「景福殿賦」

「星居宿陳、綺錯鱗比」(和刻本文選上)の、張注。「帶川原、花草如綺錯也」(張注)。「河岸、美

しい彩色をしていていること。○々分隰迥、阡眠、迥が遠方まで澤をおし分け草木が繁茂し

ている。分隰は湿地を左右に分けているさま。阡陌は原野のいろどりをいう。晉陸機「起

洛道中作詩「行行遠已遠野途曠無人山澤紛紆餘林薄杳阡陌」注「善曰楚辭曰

遠望兮阡陌濟曰阡陌原野之色」(和刻本文選三六〇四)。「高平曰原下濕曰隰分下

濕処其原迥出也阡陌樹木負也」(張注)。「字賦阡陌同茂密貌又色深貌」曰「遙視閭

未明也張衡南都賦青冥阡陌註林木衆色幽昧也楚辭九懷遠望兮阡陌」(詩解)。

○5 膾膾橫周甸 周の地味肥えて美しい平野を横たえている。膾膾は地味が肥えてうるわ

しいさま。毛詩十六大雅縣「周原膾膾藟藟如飴」(毛傳)周原(滎之南也)膾膾美也。

藟菜也。荼苦菜也。(鄭箋)廣平曰原周之原地存岐山之南膾膾然肥美其所生菜

雖有性苦者甘如飴也」(毛詩古注三六〇下張注)周甸は周の發祥の地甸は周代王地の

周圍千五百里外の五百里はげほの地。○6 苒苒晉田 草生い茂る晉の地を麗しい田とし

て歸く。苒苒は田畠の美しく盛んに作物が育つさま。晉左思「魏都賦」蘭渚苒苒

石瀨游游傷(注善曰曹植責躬詩曰夕宿蘭臺左傳曰原田苒苒杜預曰若原

田草苒苒每然)良曰植蘭曰蘭渚苒苒盛貌石瀨有石而淺流湯湯急流貌」(和

刻本文選六八〇の(六)。「春秋左傳正義十六僖公三八年傳「晉侯必之聽樂人之誦曰原田每每

舍其舊而新是謀」(杜元注)高平曰原。喻晉軍美盛若原田之草每每然可以謀立新

功不足念也舊心也」(張注は上記文選所引の左傳に據るものであろう。詩解も同じ)二二六

家詩以下「每苒」も「每苒」とする。「こけ」の意である。○7・8 方知急難御 長在鶴鶴の兄

篇しはまゝに兄弟の助けを呼ぶ聲が鳴り響く、長く仲良くして欲しい鶴鶴の兄

弟達よ。方知はちようどいま感づいたの意。急難響は鶺鴒の甲高くせわしげに尾を振り鳴くもささう。『毛詩』九、鹿鳴之什詁訓傳十六小雅、常棣「常棣、燕兄弟也。殷管蔡之失道、故作常棣焉。」脊令在原、兄弟急難。『毛傳』脊令、鸛也。飛則鳴、行則攬、不能自舍耳。急難、言兄弟之相救於急難。箋云、雖渠水鳥而今在原、失其常處、則飛則鳴、求其類、天性也。猶、兄弟之於急難。『毛詩』古注九、張法、詩解、書後部群書治要三のにおいて脊令を鶺鴒とす。晉、袁宏「三國名臣序贊」一將命、公庭、退、忘私位、豈無鶺鴒國、慎名器。〔注善〕毛詩曰鶺鴒在原、兄弟急難。〔胡刻〕李善注文選四七、和刻四七、毛詩義疏「鶺鴒水鳥、一名渠梁、大如鸛、脚長、尾尖、背上青灰色、腹下白、頸下黑、如連錢。故杜陽謂之連錢。〔御覽九三、鶺鴒〕」

百詠和歌

原 江淹起恨年 江淹が恨の賦云 平原に人のかはねあり 蔓草はぬにまつへり 拱木にましぬをおさむ 民生く、いにたり 天道こゝに論せんや 僕もとより恨にる人なり 心敬焉ことやまず 只古の人の恨にふしてしににしをおもふ 又云土地豊に廣くしてめぐりひとしきをけりと云り (『爾雅』中、釋地、五方「下、溼曰陂、大野曰平、廣平曰原、高平曰陸」)

しもうつむまくすか原や秋風のくれゆくことにうらみけるあゝ
長在鶺鴒篇 鶺鴒は水鳥也 おほきさすめぬごとし尾ながくしてせなかの色青くはい

色なり 腹の色白してくびめしも黒し 此故に桂陽の人なつて連錢といへり この鳥
水をはなれて原にあり 古郷の浪をこひてとひ、ともをよひてなくと云り

舊里はさそぞとひしう水鳥のおもはぬくうの原になく聲 *鶴歌

14 野

1 鳳去秦郊迥
2 鶉飛楚塞空
3 蒼梧雲影去
4 涿鹿霧光通
5 草暗平原綠
6 花明春徑紅
7 誰言板築士
8 獨在傳巖中

鳳去りて秦郊迥なり、
鶉飛びて楚塞空し。
蒼梧雲の影去りぬ、
涿鹿霧の光通ふ。
草暗うして平原綠なり、
花明かにして春徑紅なり。
誰か言ふ板築の士、
獨りに在り傳巖の中に。

和 好古

渺茫荒野遠
草色接晴空
狐兔有時過
輪蹄久不通
月來寒霧白
日照落霞紅
千古蒼梧恨
依依在眼中
渺茫たり荒野遠く、
草色晴空に接る。
狐兔時に過る有り、
輪蹄久しく通はず。
月來り寒霧白く、
日照り落霞紅なり。
千古蒼梧の恨
依依として眼中に在り。

枚異

野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
鳳去	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊	秦郊
鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛	鶉飛
蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧	蒼梧
涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿	涿鹿
平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原	平原
春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑	春徑
板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築	板築
傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖	傳巖

8. 中	8. 傳巖	8. 獨在	8. 士	8. 板築	8. 誰言	6. 紅	6. 春徑	6. 花明	5. 綠	5. 平原	5. 草暗	4. 通	4. 霧光	4. 涿鹿	3. 去	3. 雲影	2. 蒼梧	2. 空	2. 楚塞	野嶠城
中	傳巖	獨在	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	池底
中	傳巖	獨在	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	關
中	傳巖	獨在	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	張注
中	傳巖	獨在	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	慶長
中	傳巖	獨在	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	淺草
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	陽
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	三
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	全唐
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	陽
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	和
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	李
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	李巨
中	傳巖	猶處	士	板築	誰言	紅	春徑	花明	綠	平原	草暗	通	霧光	涿鹿	去	雲影	蒼梧	空	楚塞	詩解

○1「延寶版本出作去。迥一作舞。(詩解)。○2「平一作少。(詩解)。○3板詩紀作版。○4「在一作處。從延寶版本作在(詩解)。

【注解】

○1鳳去秦郊迥 鳳とともい。蕭史と弄玉と去つて秦の郊外へさびしくなつた。 秦の穆公の娘

弄玉が蕭史とともに鳳に乗つて飛び去つたという故事。秦郊とは秦の郊外の野。迥は迥に同じ。

はるか、とおい。『列仙傳』「蕭史教弄玉吹簫。作鳳聲。鳳皇來其屋。秦穆公為作鳳臺。

「日皆隨鳳飛去。(藝九十鳳心。張注)。「説文。野。郊外也。(詩解)。「蒙求」「蕭史鳳臺」。

「鷓冠子」「鳳鷓火禽。陽之精也。德能致之。其精畢至。(藝九十鳳心。張注)。「鷓冠子」(度萬八)。

○2鷓飛楚塞空 鷓が飛び去り楚の國境もひっそりとなつた。鷓尾は楚の分野。南方の張

宿から羽翼宿軫宿にわたる部分。楚塞は楚の地。塞は國境。『荆國圖』「廣楚當翼軫。翼軫

在巳為鷓尾。楚之分野」(張注。荆州圖記)「荆州圖經の類々未詳)。「春秋元命苞」「軫星散為荆

州。分為楚國。荆之為言強也。(藝六荆州心)。「史記」(三)「天官書」「羽翼為羽翮。主遠客。(注)

正義曰「羽翼三十二星。軫四星。長沙一星。轄二星。合軫七星皆為鷓尾。於辰在巳。楚之分野」

(標點本130)。「○3蒼梧雲影去 蒼梧の地から白雲が立ち昇る。蒼梧は(に九疑と名づく。

楚の地にある。今の廣西壮族自治区の東南部(歴地唐の)。「舜が南巡して蒼梧の野に崩じた。

「歸藏」「有白雲出蒼梧。入于大梁」(藝一雲心。張注)。「史記」(一)「五帝本紀」(舜)「踐帝位三

九年。南巡狩崩於蒼梧之野。葬於江南九疑。是為零陵。(注)「集解」「魏案皇覽曰。舜冢在零

陵。營浦縣。其山九谿皆相似。故曰九疑」(標點本130)。「晉陸機」「白雲賦」「翼靈鳳於蒼梧。起滯

陵營浦縣。其山九谿皆相似。故曰九疑」(標點本130)。「晉陸機」「白雲賦」「翼靈鳳於蒼梧。起滯

龍於漢汗(初ニ雲翼鳳也。全晋文云云。209)。○4 涿鹿霧光通 涿鹿には雲霧の放った霧の光がにちこめる。涿鹿は今の河北省西北部にある地(歴地唐好ゆ)。黄帝が蚩尤と戦い蚩尤は三日三夜霧をたちこめたという。「玄女戰法」「黄帝与蚩尤戰於涿鹿野。三日三夜大霧也」(張法、御覽十五霧九の)。晋崔豹「古今注」上輿服「大駕指南車、起於黄帝、帝與蚩尤戰於涿鹿之野、蚩尤作大霧、士皆迷、四方於是作指南車、以示四方、遂擒蚩尤而即帝位、故後常建焉」(四叢14、初二霧涿鹿野)。○5、6 草暗平原綠 花明春徑紅 草は深く繁り平原は緑漸ち、花は咲きはこり春の小道は紅があふれている。この二句は唐の楊炯(一〇六九)の次の句の影響を受けていると考えられる。「和輔先入昊天觀皇騰」(作古詩)「草茂(作蔓瓊階)綠(花繁)寶樹紅」(全唐詩)。李嶠(三四七三)は十分影響を受けるに足る。第六句は「史記」李將軍傳贊「桃李不言、下自成蹊」をも踏まえている。表注「此鄭公之秀句也」とするも未詳。「平原」は平野であるが、「少原」とするものあり。韓詩外傳九「孔子出遊少原之野、有婦人哭甚哀」(藝三野原、四叢14、原作源、諸本同)。○7 誰言板築士 誰がいのか板築の士のうわごとを。板築士とは城壁を板と杵を用いて築く人。傳説を指す。「説苑(七雜言)」傳説負壤土釋板築而立佐天子則其遇武丁也。(四叢14)。○8 獨在傳巖中 ばらばらと傳巖の中に隠れ住んでいる。傳巖は身を隠していたいわや。所在に諸説あり(歴地隋書)。「尚書」説命上「高宗夢得説(孔安國傳)盤庚弟小乙子名武丁、德高可尊、故號高宗、夢得賢相、其名曰説、使百工營求諸野、得諸傳巖、(孔安國傳)使百官以所夢之形象、經營求之於外野、得之於傳巖之巖」(古法三經五ノ三張法)。「史記」三般本紀「帝小乙崩、子帝武丁立、帝武丁即位、思復興殷、而未得其位、三年不言、政事決定於冢、早以觀國風

武丁夜夢得聖人、名曰說。以夢所見視羣臣百吏、皆非也。於是迺使百工塗塗求之野、得說於傳險中。(注彙解)徐廣曰、尸子云、傳巖在北海之州。李隱曰、舊本作險、亦作巖也。正義曰、地理志云、傳險、即傳說、版築之處、所隱之處、巖名、聖人穴窟。在今陝州河北縣北七里、即唐國魏國之界。又有傳說祠、注水經云、沙澗水北出巖山、東南流、傳巖、唐傳說隱室前。俗名聖人窟。是時說爲胥靡、築於傳險、則於武丁。武丁曰是也。得而與之語、果聖人、舉以爲相、殷國大治。故遂以傳險、姓之。說曰傳說。(四書叢三〇八の標點本三〇九の詩解)。

百詠和歌

野 鷄飛楚塞空、鷄尾楚分野也。鷄、翼宿并軫宿にあはれり。巳方也。鷄は巳の神にかたとれり。

これやこのみやこのにつみ鷄なくふしみのおくの野への夕暮
獨在傳巖中、殷武帝位につきて後三年まつうことをいけす、夢の中に傳説をみる
さめて其形をうつしてもとむるに傳巖の野にしてえたり、武帝まつうことをまかせて海
をわたらんには汝を舟かちとせむとそ聞えける、武丁は高宗也
草枕ゆめちいさきしいうなからさむるうつこいみよし野の花

15 田

1 貢禹懷書日
張衡作賦晨

貢禹が書を懷きし日、
張衡が賦を作りし晨。

和 便隨

村父就田日、
杜鵑鳴月辰、
村夫田に就く日、
杜鵑鳴く月の辰。

3 杏花開鳳吟
 4 昌葉布龍鱗
 5 瑞麥兩岐秀
 6 嘉禾九穗新
 7 寧知帝王力
 8 擊壤自安貧

杏花は鳳吟に開き、
 昌葉は龍鱗に布けり。
 瑞麥兩岐に秀でたり、
 嘉禾九穗新なり。
 寧ろ知らむや帝王の力を、
 壤を撃ちて自ら貧に安んじむ。

決渠浮鴨頂
 分敵疊魚鱗
 春後麥初熟
 秋來穀正新
 年豐徭役少
 輸足自忘貧

決渠には鴨頂浮び
 分敵には魚鱗を疊めり。
 春後麥初めて熟し、
 秋來穀正に新なり。
 年豐かいては徭役少く、
 輸足り自ら貧を忘る。

校異

田	環城	池底	芙蓉	陽A(乙) 張注 慶長 淺草 陽B(丙) 十六家 全唐 陽C(甲) 和季 李巨 詩解
1	貢禹	貢禹	貢禹	貢禹
1	懷書	懷書	懷書	懷書
1	日	日	日	日
2	張衡	張衡	張衡	張衡
2	作賦	作賦	作賦	作賦
2	晨	晨	晨	晨
3	杏花	杏花	杏花	杏花
3	開	開	開	開
3	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟
4	昌葉	昌葉	昌葉	昌葉
4	布	布	布	布

田	龍	瑞	兩	秀	嘉	九	新	寧	帝	力	擊	自	安
磯	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
池	龍	瑞	兩	秀	嘉	九	新	寧	帝	力	壞	貧	貧
底	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
漢	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
華	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
陽	龍	瑞	兩	秀	嘉	九	新	寧	帝	力	擊	自	安
A	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
臣	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
存	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
張	鱗	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
注	鱗	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
慶	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
長	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
淺	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
草	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
陽	龍	瑞	兩	秀	嘉	九	新	寧	帝	力	擊	自	安
臣	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
于	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
家	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
全	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
唐	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
陽	龍	瑞	兩	秀	嘉	九	新	寧	帝	力	擊	自	安
C	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
臣	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
和	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
李	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
李	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
巨	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
詩	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧
解	麟	麥	波	禾	禾	穗	折	知	王	力	壞	貧	貧

○₁ 延寶版本作「作傲」(詩解)。○₂ 吟詩紀作「幹」。○₃ 吟詩紀作「幹」。○₄ 延寶版本作「吟」(詩解)。○₅ 延寶版本葉
 作「藥」(詩解)。○₆ 陌詩紀作「麥」。○₇ 延寶版本同類作「九穗」(詩解)。

注解

○₁ 貢禹懷書日 貢禹が上書文を天子に奉った日。貢禹、字を少翁、琅邪の人。明經、繁
 行を以て世に聞え、徵されて博士、涼州刺史となり、病んで官を去った。漢の元帝が即位して諫大
 夫となる。後光祿大夫の時上書文を奉る。漢書_{七十三}、王貢傳「禹上書曰、臣禹年老貧窮、

家嘗不滿萬錢。妻子耕豆不贍。襁褓不完。有田百二十畝。陛下過。意徵臣。臣實田百畝。以
 供車馬。臣騎犬馬之齒八十一。血氣衰竭。耳目不聰明。非復能有補益。所謂素餐尸祿。冷
 朝之臣也。誠恐一旦瀕於氣竭。不復自還。遂應薦於官室。骸骨無所歸。孤魂不歸。不勝
 私願。願乞骸骨。及身生歸鄉里。死之所恨。 (標點本の張注。詩解)。懷書以上書をふところ
 にする意。懷にはおくる意もある。骸骨(退職)を乞う上書文。 ○又張衡作賦。日夜。張衡が
 歸田の賦を作つた朝。後漢の張衡が四十になるまで志を得ず。郷里に歸ろうとして。賦を作る。
 「歸田賦。張平子(注)翰曰。衡遊京師。四十不仕。順帝時。闕官用事。欲歸田里。故作是賦。
 (本文)遊都邑以永久。無明略以佐時。從臨川以羨魚。俟河清乎未期。感蔡子之慷慨。從
 唐生以決疑。(注)善曰。淮南子曰。臨河而羨魚。不如歸家織網。言南誘曰。羨願也。左氏傳。子駟
 曰。周諺有之曰。俟河之清。人壽幾何。杜預曰。遠詩也。言人壽促而河清遲也。善曰。史記曰。
 蔡澤燕人。遊學于諸侯。不遇。從唐舉相。慷慨壯士。不得志於心也。(和刻本文選十五の張
 注。詩解)。 ○3 杏花開鳳吟。杏の花が美しいあぜにいろどりよく咲いた。次の句とともに
 春の耕作をいう。苜蓿の葉がまえて始めて耕し、あんずの花が開いて百穀をまくからいう。齊王融
 「永明九年。梁秀才文五首之一。將使杏花。昔葉耕獲不待。(注)善曰。沈勝之書曰。杏始華。葉輒
 耕。輕土弱土。墾杏葉落。復耕之。輒墮之。此謂耕而五獲。呂氏春秋曰。冬至五旬七日。苜蓿始生。苜蓿者
 草之先者也。於是始耕。高誘曰。苜蓿。苜蓿。水草也。翰曰。月令云。杏花生。獲百穀。獲收苗也。
 穂也。失也。(和刻本文選三十六の苜蓿)。「世說曰。杏花發。可耕。吟出徑也。花如鳳文也。」張注。世說
 の佚文か)。 ○4 苜蓿布龍鱗。苜蓿の葉が龍のうろこのように田のくろいしきつめる。

昌と莒は通用字。莒蒲の葉が龍のうろこのように敷きつめ文なす叶(くろ)に生えている。

『吳氏本草』「莒蒲一名莒蕪、一名昌陽(藝文類聚)」。漢楊雄「甘泉賦」一「嵌巖瀛巖其龍鱗一」。

(注)善曰。孔安國尚書傳曰。嵌開張之貌也。龍鱗似龍之鱗也。一初刻本文選七卷(望)。一後漢班固

「西都賦」一下有鄭曰之。沃衣食之源。溝澍刻鏤原隰。龍鱗沃渠。降雨。荷擗楚成雲。五

穀垂穎。桑麻鋪胡。胡胡。注善曰。勝。稻田之暇也。爾雅曰。高卑曰原。下濕曰隰。濟曰。漢小

渠。勝。畔界。隔也。刻鏤龍鱗。皆地之畔疆。相交錯成文。高(和刻本文選一)五。詩解。一。世說。

曰。莒蒲葉生可種。班孟堅西京賦曰。原濕菴鱗(張注。世說。佚文)。

○5 瑞麥兩歧秀。後魏崔鴻「前涼錄」。「永嘉元年、

めでたい麥の秀が一本の莖に二岐に分れて出た。

嘉麥(莖九穗生)姑臧(御覽八六卷)。宋書「九符瑞志下」。「晉武帝太康十年六月、

嘉麥生扶風郡(莖九穗是歲收三倍(斷句本七卷))。東觀漢記「張堪為涪陽太守勸

民耕種以致殷富百姓歌曰桑無附枝麥穗兩歧張君為政樂不可支(藝文五卷)。

張注。詩解引後漢書張堪傳(標點本100)。

○6 嘉禾九穗新。めでたい穀物の穂は

一株に九つめざらしのこと。宋書「九符瑞志下」。「宋文帝元嘉十一年八月、嘉禾下莖

九穗生北汝陰(北汝陰)後漢許慎「說文」。「禾嘉穀也。以二月而種八月始熟得時之中

改謂之禾(藝文五卷)段注七上(中)」。嘉禾同類はめでたい穀二莖合して一穂となる。同

書「唐叔得禾(異畝同穎)獻諸天子王命歸周公于東作歸禾(啟龍也。穎穂也。禾各生

一龍而共為一穂天下稱同之象)周公德邦以致故歸之(藝文五卷)尚書古注七「周書微子之

命十七卷(詩解)。○7・8 寧知帝王力擊壤自安貧。むしろ堯さまの偉さが知られ

よう。壤撃つて日がな戯れ貧乏生活の中に安らぎがある。平和であることが帝王堯の力によることを知らず、民は壤を撃つて歌をうたい太平を樂しんだやまをいつ。

帝王世紀「夔放山川谿谷之音作樂太章天下太和百姓無事有五十(樂府詩集卷之三)五十作八九十)老人擊壤於道觀者歎曰大哉帝之德也老人曰吾日出而作日入而息擊井而飲耕田而食帝何力於我哉於是景星曜於天甘露降于地朱草生於郊鳳皇止於庭嘉禾莢於畝豊穰湧於山(藝文)帝堯陶唐氏也。張注。詩解引十八史略堯紀鼓腹擊壤。この老人の歌が撃壤歌(樂府詩集)と稱される作。『白虎通』「天下太平德至地即嘉禾生(穀)起(藝文)八祥瑞(六)封禪」。

百詠和歌

田 菅葉布龍鱗 菅蒲の花のしける色龍の鱗に似たり この草のおふるとき田をうふへしといへり。

やましろのよとのあやめおひにけり鳥羽田のさなへ今やとるらん

嘉禾九穗新 世のまつりごとすなほなるときあはくきい九穗ありといへり 又嘉禾穀

也 春二月熟す 太平の時九穀にて合穂といへり

きのみみし山田の早苗ひと本いくへ浪よる今朝のほどちぞ

*九穀合穂の語の典故未詳。九穀が穂をたわねに着けること、合穂の用例。『抱朴子内篇論仙』「當夏而漸青、合穂而不秀、未實而萎零」(の)學名。へ穂が出て花咲かず。悪い例。

- 1 銅駝分鞏洛
- 2 劍閣啓臨邛
- 3 紫微三千里
- 4 青樓十二重
- 5 玉關塵似雪
- 6 金穴馬如龍
- 7 今日中衢士
- 8 堯樽更可逢

銅駝鞏洛を分ち、
劍閣臨邛に啓く。
紫微三千里、
青樓十二重。
玉關塵雲に似たり、
金穴馬龍の如し。
今日中衢の士、
堯樽更に逢ふ可し。

校異

道	暁峨	池底	芙蓉	陽	伏存	張注	慶長	淺草	陽	千	金	唐	陽	和	李	李	巨	詩解
道	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝
道	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
道	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛	鞏洛
道	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣	劍閣
道	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓	啓
道	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛
道	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵
道	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛	臨邛

和 眞圓
來往通千里
臨波心孔珮
秦松青蓋列
隋柳綠陰重
壞衲一條杖
征鞍八尺龍
行行誰遂路
聖代可相逢

來往千里を通ふ
波に臨み心孔珮む。
秦松青蓋列り、
隋柳緑陰重なる。
壞衲一條の杖、
征鞍八尺の龍、
行行たり誰か路を遂らむ。
聖代相逢ふ可し。

注解

○銅駝分鞏洛 銅で作ったらくだが鞏と洛の二つの地を分ける。鞏は河南省鞏縣。洛は河南省洛陽。『廣韻』下平聲ニ歌ニ駝駝駝俗從從也。駝俗(ハク五註校正宋本廣韻)。晉陸翹『鄴中記』「二銅駝如馬形長一丈高一丈。足如牛尾長一尺。脊如馬鞍。在中陽門外。夾道相向。」(初平九駝。夾中陽門。叢新記(四))。銅駝街が今の河南省洛陽市の故洛陽城中にある。華延壽『洛陽記』「兩銅駝在宮之南街。東西相向。高九尺。洛陽記謂之銅駝街。」(藝文西駝駝引洛中記。張注二本。詩解)。晉陸機『洛陽記』「洛陽有銅駝街。漢鑄銅駝二枚。在宮南。四會道相對。俗語曰。金馬門外集衆賢。銅駝陌上集少年。(御覽五八西京河南府名(七))。『洛陽地圖』「亂筆在洛水之間。鞏固也。言四面有山可以鞏固也。」(御覽五八西京河南府名(七))。○劍閣啓臨邛 長安から蜀に入る道に大劍小劍の要害の地があり、これに閣道がかかっている。これを劍閣といひ臨邛の地に向つてひらけている。臨邛は四川省邛崃縣の地。(歷代唐分(66)の(4))。晉張載『劍閣銘』「惟蜀之門。作固作鑿。是曰劍閣。壁立千仞。(注)善曰。酈元水經注曰。小劍成北去大劍二十里。連山絕險。飛閣相通。故謂之劍閣也。濟曰。劍閣言其峯如劍。其勢如閣。壁立謂峻也。千仞。言高也。和刻本文選五十六(7)の(7)。」○紫微三千里 紫微は北方の邊塞。長安より邊塞まで三千里もある。三千里は極めて遠い距離のたとえ。微。微ともいさざる意。さかい、とりでの意。『集韻』三平聲三蕭三「邀。邀。遮也。或从手。」(70)。『集韻』三平聲三宵四「邀。微。遮也。或从手。」(72)。晉・崔豹『古今注』上。都邑ニ「秦所築長城。土色皆紫。漢亦然。故云紫塞。南方微色赤。故謂之丹微。微。繞也。」(四叢上の(1)詩解)。「東北謂之塞。西南謂之微。王闡去長安三千里。百里。在

沙州龍勒山界（詩解）。唐楊炯（一）原州百泉縣令李君神道碑「累遠原州百泉縣令
科通紫微印負重州（全唐文一九四〇三〇）。〇4青樓十二重青塗りの樓が十二層になっ
ている。『南史』五本紀。廢帝東昏侯「武帝與光樓上施青塗世人謂之青樓（斷句本の詩解）
史記』上。孝武本紀「方士有言黃帝時爲五城十二樓（標點本の藝文三樓）。魏曹植「美女
篇」「借問女安居乃在城南端青樓臨大路高門結重關（和刻本文選三七〇の註）。張注作
「王褒記とする。「大路百氏六帖三樓。張注。詩解作「大道」。劉宋鮑照「代京雜篇」「鳳樓十
十二重四戸八綺窓」（「玉臺新詠」四〇の四叢。張注）。青樓は身分高い人の住む高樓。貴い
身分の女性の住む美しい高樓。遊女の居室等の意。こゝでは第三の意味であらう。〇5
玉關塵似雪 玉門關に舞う塵は雪に似ている。玉門關は甘肅省敦煌縣の西、陽關の西
北にある（歴地唐三〇一〇〇）。唐駱賓王「從軍行路難二首之二」「君不見玉關塵色暗邊庭
銅鞮雜虜寇長城」（全唐詩三七〇）。銅鞮は山西省沁縣の南西の地。歴地唐四〇四。梁何遜
詠雪詩「凝階似月夜拂樹曉疑春蕭散忽如盡徘徊已復新若逐微風起誰言非玉
塵」（藝文三雲詠雪詩）。玉塵は雪の異名とされる。參考。唐李益「一夜上受降城聞笛」「回
樂峯一作烽前沙似雪受降城下一作上一作外月如霜」（全唐詩三三三）。〇6金穴馬如龍金
持の馬は龍のようい立派である。『東觀漢記』「郭況遷「不鴻臚」上數幸其第賜金帛甚盛
京師號況家爲金穴言其貴極也」（初十八富金穴）。張注引後漢書。『周禮』三十三夏
官庾人「馬八尺以上爲龍七尺以上爲騾六尺以上爲馬」（古注五）。藝文三馬。周尺一尺
約二・五cm。『東觀漢記』「明德后曰吾前過濯龍門見外家問起居東如流水馬如龍」
藝文三馬。張注。詩解引後漢書）。〇7今日中衢士堯樽更可逢今日街中を歩い

ている人は堯が設けた酒樽の酒が自由に得られるように、ゆきすりに聖人の道に逢うことができる。中衢は四方に通じる大道の中ほど。堯樽は中衢に酒樽を設けて道行く人に好きにだけ飲ませたことをいう。これは政道の喩えであり、民に生計を自由にさせて誤りがなかつたことをいう。『淮南子』十、繆稱訓「聖人之道、猶中衢而致尊邪（許慎注：道言通謂之衢、尊酒器也。過者斟酌多少不同、各得其所宜。一四叢ナル。②。藝と云、樽也。張注。詩解。張注亦引孟子未詳。）」高、今、丹者、謂今時、君有道、同堯樽、更可逢也（張注）。

百詠和歌

道 玉關塵似雪 玉關の地に塵沙おほくありて雪に似たり。

せきの戸を雪にしらむとみしはらや沙にあくるそらめなりけり

今日中衢士 堯樽更可逢 堯のとき天下みちあり 此時にあへる人みなむな
しからず えたるどころあり 此故に堯のみちはちまたに樽酒をまふけたるがごと
し ゆきすぐるもの各くみてえたりとせり

せきのとをさいでいくかになりぬ 履みちある御代にあふさかの春

17 海

和 便隨

1 習坎疏丹壑

習坎は丹壑を疏ち、

俯仰渺無限

俯仰すれば渺として限り無し、

2 朝宗合紫微

朝宗は紫微に合へり。

天依波浪微

天依く波浪微なり。

3 三山巨鼈踊

三山に巨鼈踊り、

三山仙閣遠

三山仙閣遠く、

校異

- 4 萬里大鵬飛
- 5 樓寫春雲色
- 6 珠含明月輝
- 7 會當添霧露
- 8 方逐衆川歸

萬里に大鵬飛ぶ。
 樓は春雲の色を寫し、
 珠は明月の輝を含む。
 會當に霧露を添へて、
 方に衆川の歸らむを逐ふ。

九嶽客船飛 九嶽客船飛ぶ。
 出沒魚龍怪 出沒す魚龍の怪。
 吐吞日月輝 日月を吐吞して輝く。
 桑田曾幾變 桑田曾て幾ばく變せし。
 惟見衆流歸 惟だ見ら衆流の歸せんと。

										海
4 ₂	4 ₁	3 ₂	3 ₁	2 ₂	2 ₁	1 ₂	1 ₁	海	海	海
大鵬	万里	涌	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	池底
大鵬	万里	涌	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	英華
大鵬	万里	涌	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	陽A
大鵬	万里	涌	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	峽存
大鵬	万里	躍	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	張注
大鵬	万里	涌	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	慶長
大鵬	万里	涌	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	淺草
大鵬	九萬	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	陽B
大鵬	九萬	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	王家
大鵬	萬里	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	全唐
大鵬	萬里	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	陽C
大鵬	萬里	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	和季
大鵬	萬里	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	李巨
大鵬	萬里	湧	巨鰲	紫微	合	朔宗	丹壑	疏	習坎	詩解

○₂龍詩紀作熬。○₃延寶版本湧作踊。○₄萬里詩紀一作九萬。一萬里一作九萬(詩解)。

海嶼城	沈底	英華	陽A	伏存	張法	慶長	淺草	陽B	三家	全唐	陽C	和季	李巨	詩解
花	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛	飛
樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫	樓寫樓寫
春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲	春雲春雲
色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色
珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含	珠含珠含
明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月	明月明月
輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝	輝
會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會	會
當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添	當添
霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露	霧露霧露
方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐	方逐
衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川	衆川
歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸	歸

注解

○₁習坎疏丹壑 險阻の地には丹あかい谷を疏かちとおす。習坎は險阻な山が雲なること。口周易三、「坎下習坎」蒙曰習坎重險也(魏王肅注)坎以險為用故特名曰重險。言習坎者習乎

重險也。(本文)水流而不盈、行險而不失、其信(王弼注)險之極、故水流而不能盈也。(周易古注
三の22上。張注一本引之)。丹壑(丹い色のたに。唐盧照鄰「贈益府裴錄事詩」浮雲映丹
壑、明月滿青山。青山雲路深、丹壑月華臨。(全唐詩四二四))。〇二朝宗合紫微、人臣が天
子に朝宗して紫微宮(宮廷)に集るように江漢が海に流れ込んで天上の紫微宮に通ずる。
昔、河水は天河と通じていと考えられていた。朝宗は諸侯が天子に拜謁すること。『尚書』
三夏書、禹貢「荆及衡陽惟荊州」(孔穎達傳)北據荆山、南及衡山之陽。江漢朝宗于海。『水經』此州
而入海、有似於朝。百川以海為宗。宗、尊也。『尚書古注』三、。藝八海水(張注)。紫微は北斗
の北にある星の名。天帝の居所とされる。『晉書』十、天文志上「紫宮垣十五星、其西蕃七、東
蕃八、在北也。北。一曰紫微、大帝之坐也、天子之常居也。〔標點本290〕。詩解』。〇三三山巨鼈踊
蓬萊、方丈瀛洲の三仙山を大がめがおどり上るように背負っている。『博物志』「滄海之中有
蓬萊、方丈瀛洲、三神山、金銀爲宮闕、仙人所集」(初六海山)。巨鼈、空想上の大海がめ。海中
の五仙山を載せているという。『晉書』海賦「水府之内、極深之底、則有崇島、巨鼈、
瓠、(注)善曰、崇島、五岳也。巨鼈、太鼈也。列仙傳曰、巨鼈負蓬萊山、而指滄海之中。列子曰、渤
海之東名曰歸墟、其中有五山、帝命禺彊、使巨鼈負之而浮。五山は岱、輿、員嶠、方壺、瀛洲、蓬萊をい
う。〇四萬
里大鵬飛、大鵬は「たび飛ぶや九萬里。『南華真經』(莊子)。「内篇、逍遙遊」。「北冥有
魚、其名為鯨、鯨之大不知其幾千里也。化而爲鳥、其名為鵬、鵬之背不知其幾千里也。漚
沫者、其爲者也。漚之言曰、鵬之徙於南冥也。水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里。〔四
叢一の四。張注、詩解〕。〇五樓寫春雲色、蜃氣樓は春の雲の明るい色を寫して美しい。

「史記」三三、天官書「海旁嘖氣象樓臺、廣野氣成宮闕、然雲氣各象其山川、人民所聚、積

(標點本主) 〇。初六海、辰樓引漢書、張注詩解同。宋陸佃「埤雅」三、辰一雜兵書曰、東

海出氣如龍、渭水出氣如蜃、蜃形似蛇而大、腰以下鱗盡逆、二曰狀似鱗龍、有角有角

背鬣作紅色、嘖氣成樓臺、望之丹碧、隱然如在煙霧高、今俗謂之蜃樓、將雨即見、

「詩經」云、登州海中、時有雲氣如宮室、臺觀、城、人物、車馬、冠蓋之狀、謂之海市、或云蛟蜃之

氣、(叢集初初) 〇。詩解)。春雲といつたのは、蜃氣樓が春夏の間に多く出ることによる。〇6

珠合明月輝、眞珠は明月の輝きをたたえている。「史記」三三、龜策列傳「明月之珠出於

江海、藏於蚌中、蛇龍伏之」(標點本) 〇。詩解)。「淮南子」十六、說山訓「明月之珠出於蛇

蜃、後漢許慎法珠、有夜光、明月、生於蛇中」(四叢本) 〇。晉左思「吳都賦」「蚌蛤珠胎

與月虧全」(注) 〇。後漢許慎法珠、有夜光、明月、生於蛇中、(四叢本) 〇。晉左思「吳都賦」「蚌蛤珠胎

則蚌蛤實、月晦則蚌蛤虛、向日、蚌蛤珠胎、皆鑿鑿之物、月滿則珠全、月虧則珠缺、(「初刻

本文選之) 〇。張注、詩解引「古今注」。「東方朔神異經」「西北荒中有三金闕、相去百丈、

有明月珠、徑二尺、光照千里」(初三珠、照金闕) 〇。會當添霧露、海はさつと霧露を

受けて水を増すであらう。後漢、張衡「奏事」「飛塵增山、霧露助海」(初三露助海) 〇。詩解。「山不

讓塵、故能成其高、海受霧露、亦能成其深、今此意者、欲同霧露以歸海也、(一本木云

虛、海賦曰、蒼海瀟、雲霧涌、不決、蓬蓬、莫不來往、此言、小水滴若添、霧露、常逐川也、(張

注、海賦の當該部分は初刻本文選上と、〇に見えらる) 〇。方逐衆川歸、小水滴

滴ではあるが、多くの川に寄り集って大海に流れ込もう。晉左思「吳都賦」「百川派

別、歸海而會、(注) 〇。劉曰、字說曰、水別流為派、善曰、尚書大傳曰、百川趨于海、翰曰、

百川派別、歸海而會、(注) 〇。劉曰、字說曰、水別流為派、善曰、尚書大傳曰、百川趨于海、翰曰、

江海下故百川歸會之...言衆水混合既入廣大之處(和刻本文選五の130。詩解)。

百詠和歌

海 万里大鵬飛、北海に大魚あり鯨といへり、そのせなかのひろきこといく万里といふ
ことをしらすこの魚化して鳥となれり、名て大鵬と云り、六月の空に動きて南にむか
ふ一度巖に九万里にいたるといへり

越の海そらとふ程はおほとうの影はかりこそ底にみえけれ

珠合明月輝、海中におほきなる蚌蛤ありなかに明珠あり、月とともに虧盈
月の望にはなかにみあり、月のつこもりにほなかわさし、明月の珠これなり、蚌蛤
珠といへり

三月月の影とひとつにみし珠はおさしなみよに有明のそら

18 江

- 1 日夕三江望
- 2 靈潮万里廻
- 3 霞津錦浪動
- 4 月浦練光開
- 5 湍似黄牛去
- 6 濤如白馬來

日夕 三江を望む、
靈潮 万里に廻る。
霞津 錦浪動き、
月浦 練光開く。
湍は黄牛の去るに似たり、
濤は白馬の來るが如し。

和 兼方

長江杳無限、長江杳として限り無し、
小艇二三回、小艇二三つ三つ回る。
波上烟光合、波上に烟光合ひ、
天間碧色開、天間に碧色開く。
激聲雷每響、激聲雷のと毎に響き、
澄影月時來、澄影の月時に來たり。

枝異

英靈已傑出
誰識脚雲才

英靈は己に傑士なり、
誰か脚雲が才を識らむ。
擊楫中流志
楫を擣つ中流の志
遙懷祖邀才
遠に懐ふ祖邀の才

3 ₂	5 ₁	4 ₃	4 ₂	4 ₁	3 ₃	3 ₂	3 ₁	2 ₃	2 ₂	2 ₁	1 ₃	1 ₂	1 ₁	江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江 江
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	月夕	陽Aに依存
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	表注
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	慶長淺草
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	陽日丙午の家
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	全唐陽C甲和季
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	季巨
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	季巨
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	詩解
黄牛	端似	開	練光	月浦	動	錦浪	芙蓉	迴	万里	靈湖	望	三江	日夕	

江 漢	池底 英華	陽A 二	佚存	張注	慶長	淺草	陽B 四	二	家全	唐陽 C甲	和	李	李巨	詩解
5.2 去	6.1 去	6.2 去	6.3 去	6.4 去	6.5 去	6.6 去	6.7 去	6.8 去	6.9 去	6.10 去	6.11 去	6.12 去	6.13 去	6.14 去
白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬	白馬
來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來	來
英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈	英靈
已	已	已	已	已	已	已	已	已	已	已	已	已	已	已
傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士	傑士
誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識	誰識
卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲	卿雲
才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才	才

〇〇「光一作花。今從延寶版本」(詩解)。 〇〇「延寶版本、浦作瀨」(詩解)。 〇〇「延寶版本從作如」(詩解)。

注解

〇7日夕三江望 ひねもす三江を望み見る。三江は諸説あるが、次の文により浙江、吳松浦陽江の三江と考えられる。晉・郭璞「江賦」注「五湖以漫漭」。灌江(諸本三江)而浦會。呼吸萬里吐納靈潮。自然往復或夕或朝。(注)善曰：南書曰「三江既入震澤底定。孔安國曰：自彭蠡江分為三入震澤。翰曰：太湖水分為五道故曰五湖。三江謂浙江、象、松江也。善曰：呼吸萬里言其疾。向曰：呼吸吐納謂作潮波而納群流。須臾自然往復或夕或

朝皆潮水進退在朝夕而自然也。(和刻本文選十二卷の張注)。「混天之圖」(三)江、京江、
 在荊州、松江在蘇州、浙江在杭州。(張注)。京江は長江の一名。江蘇省の京口地方を
 流れる部分の呼稱(歴地隋の張注)。浦陽江は浙江省の浦陽縣の滌裏山と礮坑山に源を
 發し、錢塘江に注ぐ(歴地唐の張注)。初學記六、江一、周官、揚州其川三、江、按、三、江、
 漢書地理志注、岷江爲大江、至九江爲中江、至徐慶爲北江、蓋一源而三月。(注)鄭玄、
 孔安國注云、左、合、漢爲北江、會彭蠡爲南江、岷江居其中、則爲中江、故書稱東爲中江者、明、
 岷江至彭蠡與南北合始得稱中也。又山海經、三、江者、大江中江、北江也。汶山郡有岷山、
 大江所出、岷山中江所出、東爲大江。岷山北江所出、東爲大江、其源皆在蜀也。又韋昭說岷
 江、松江、浙江、亦悉在吳也。(以下略之。山海經、三、海山、東經、詩解引之)。三江は以上の引
 用又から考察するに、いすれも蜀に水源を持つ長江の支流である。劉宋、魏延之(延年)
 「北使洛」(前登陽城路、日夕望三川)。(注)善曰、漢書曰、應劭曰、三川、今河南郡、韋昭
 曰、有河洛伊、故曰三川也。(和刻本文選三、卷の註)。〇二靈潮万里廻、うしおが万里
 四方にめぐり流れる。(のに引く郭璞の「江賦」参照。〇三霞津錦浪動、月浦練光
 開、霞のかかった渡り場では錦を洗う浪が動き、月のさした濱邊では練絹の美しい光が
 輝く。齊謝朓「晚登三山還望京邑」(餘霞散成綺、澄江靜如練)。(和刻本文選三、
 卷の登詩解)。餘霞は空一面にたちこめたがすか。唐、駱賓王「豔情代郭氏答盧照鄰」
 「峨眉山上月如眉、濯錦江中霞似錦」(全唐詩十七卷)。樂地志「穀江其水波瀾
 交錯狀似羅縠之文。因以爲名」(御覽卷五、江南諸水、穀江の註)。益州記「錦城

在益州南笮橋東流江南岸。蜀時故錦官也。其處號錦里。城牆猶在(初年七錦里)。

水經注三十三、江水一「道西城故錦官也。言錦工織錦則濯之江流而錦至鮮明」。

濯以佗江則錦色弱矣。遂命之為錦里也(水經注疏三十三)。④江蘇古籍。〇五、六

湍似黃牛去。濤如白馬來。はやせは黃牛が去るかのようであらうしく、なみは白

馬が押し寄せて来ようといふわめく。黃牛は黃牛峽。湖北省宜昌縣の西。長江の

急流(歷地唐史の黃牛山)。水經注三十四、江水一「江水又東逕黃牛山。下有灘名曰

黃牛灘。南岸重巒疊起。巖外高崖間有石色如人負刀牽牛。人黑牛黃。此

巖既高加以江湍于迴。故行者謠曰朝發黃牛暮宿黃牛。三朝三暮黃牛如

故。水路紆深迴望如矢。江水又東逕西陵峽。宜都記曰自黃牛灘東入西陵界

至峽口一百許里。山水紆曲而兩岸高山重嶂。非日中夜半不見日月。絕壁或十

許丈。其石彩色形容多所像類。林木高茂。路盡冬春。猿鳴至清。山谷傳響。有

冷冷不絕。所謂三峽。此其一也(水經注疏三十四)。盛弘之「荊州記」宜都西陵峽有

黃牛山江流紆回途經信宿猶望見之。行者歌曰朝發黃牛暮宿黃牛。三日將暮黃

牛如故也(張注。類文詩解)。白馬は四川省崇慶縣の東十里にある白馬江(中國歷史

地名大辭典三、白馬、江名124)。岷江の正流という。隋「薛道衡」入柳江詩「仗節遵嚴會揚

輪所急流。征塗非白馬。水勢類黃牛(初六、江126)。參考。杜甫「送韓十四江東

艤」一黃牛波靜灘聲轉。作急。白馬江寒樹影稀(全唐詩三六、244)。「風俗記」曰

海濤頻來有神乘白馬引之。神仙傳云是伍子胥靈也(張注)。史記六十六、吳子

胥列傳云「吳王乃使使賜伍子胥屬鏃之劍曰子以此死。伍子胥仰天歎曰嗟乎讒臣
 讒爲亂矣。王乃反誅我。乃其舍人曰必樹吾墓上以梓令可以爲器而抉吾服將吳
 東門之上以觀越寇之入波吳也。乃自刎死。吳王聞之大怒乃取子胥尸盛以鴟夷革
 浮之江中。吳人憐之爲立祠於江上。因命曰胥山。(注)吳地記曰越軍於蘇州東南
 三十里三江口。又向東三里臨江北岸立壇殺白馬祭子胥。杯動酒盡後因立廟於
 此江上。(標點本200①)。「博物志」昔吳相伍子胥爲吳王夫差所殺浮之於江。其
 神爲濤。(初六總載水濤之神曰靈胥也)。〇78 英靈已傑士 誰識脚雲才 江漢の
 英靈ともいふべき文學の士が功成り傑士となった。誰が一体司馬長脚や楊子雲の才を
 豫知できたろうか。英靈は青雲の志を抱いて文學に勵んだ前漢の司馬相如や楊雄達。
 傑士は功成り故郷に錦を飾った英靈を指す。「隋書」七十六、文學傳序「江漢英靈、燕
 趙奇俊、並該天網之中、俱爲大國之寶(七十六、七十七)」。晋左思「蜀都賦」近則江漢、
 炳炳靈靈、世載其美。蔚若若相如、儼若若平。王褒「暉暉而秀發、楊雄、合、章、
 而傑士(注)劉曰相如、司馬長脚也。若平、嚴遵也。王褒字子淵、楊雄字子雲、皆蜀人。
 若平作若子指歸、子雲、作不云方言。漢武帝讀相如子虛賦而美之。元帝善王褒所
 作甘泉洞蕭頌。揚雄奏羽獵賦。天子異焉。向曰炳、明也。載、猶生也。言江漢明靈、故
 代生豪哲(和刻本文選四〇の卷注)。「後漢書」五十三、徐樞列傳(桓)帝因問(陳)蕃曰徐樞
 袁闓、章著、誰爲先後、蕃對曰問生出入族、聞道漸訓。至於樞者、爰能江南泉薄之
 域、而角立傑出、宜當爲先(標點本200)。「和刻本四三〇の卷」詩解。二十一、家本以下傑士を傑
 出とす。こゝに對する典據。詩解は徐樞傳の例を初出とす。參考 杜甫「聽楊氏歌」

「千古來傑出士、豈待（待）知已（知）」朱曰（孟子曰）「豪傑之士雖無文王猶興」（四叢）分門集注社五部詩十六卷の。脚雲は司馬長卿（相如）と楊子雲（雄）。前注所引「蜀都賦」參照。梁劉峻絶交論「舒向金玉淵海。脚雲黼黻河漢。」注「善曰言舒向之辭同於淵海。言脚雲之文類於河漢也。」又曰漢諸儒作書者以司馬長卿楊子雲河漢也其餘浮滑也。向曰董仲舒劉向文章如金玉之珍淵海之源。司馬長卿楊子雲文章如黼黻麗河漢之屬。黼黻錦繡之屬。」（和烈本）五卷の。

百詠和歌

江霞津錦浪動 成都の西城はもと錦官ところなりこのうちの江の流れにて錦を洗に水清くして色あさやかなり 故に錦里城と云り 又江のうへのがすみの色にしきに似たりと云り

かすみしくしかつの春を来てみれば花のにしきをあらふささなみ
 濤如自馬來 伍子胥（胥）しにてかはね大江にすてられぬ その靈水神となりて白馬にのりてあらはると云り

難波江のあしのはなけのこまの色としつみしあとの浪のおもかけ

19 河

河出崑崙中 河は崑崙の中より出でたり、
 源發自星海 源は星海より發す、
 長波接漢空 長波は漢空に接す、
 洋洋接瑊石空 洋洋は瑊石空に接す、

和 元龍

校異

- 3 桃花生馬類
- 4 竹箭入龍宮
- 5 德水千年變
- 6 榮光五色通
- 7 若披蘭葉檢
- 8 還沐上皇風

桃花 馬類に生り、
 竹箭 龍宮に入れり。
 德水 行記にして變じ、
 榮光 五色に通ず。
 若し蘭葉の檢を披かげ、
 還つて上皇の颯に沐せむ。

狂瀾浸砥柱
 寒靄鎖龍宮
 聖治一清過
 奔波九曲通
 今無泮水患
 長仰禹時功

狂瀾して砥柱を浸し、
 寒靄は龍宮を鎖す。
 聖治一清に過ひ、
 奔波九曲に通ふ。
 今は無し泮水の患、
 長く仰ぐ禹時の功。

河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河
河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河	河
嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮	嶮
出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英	英
華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華	華
陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽
存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存	存
表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表	表
注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注	注
慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶
長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡	淡
草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草
陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽
西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西	西
千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千
守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守
家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐	唐
陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽	陽
中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中
和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李
李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李	李
巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨	巨
詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩	詩
解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解	解

○ 〇. 1. 「延寶版本源作河」(詩解)。 ○ 〇. 2. 「延寶版本來作生」(詩解)。 ○ 〇. 1. 「若」作且(詩解)。 ○ 〇. 2. 詩紀闕句。「諸本闕此一句」(詩解)。

風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	河曙
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	城池
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	底
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	英華
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	陽
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	秩
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	存
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	張
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	注
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	慶
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	長
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	淺
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	草
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	陽
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	因
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	子
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	家
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	全
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	唐
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	陽
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	甲
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	和
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	李
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	巨
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	詩
風	上皇	還沐	檢	蘭葉	若披	通	五色	榮光	變	千年	德水	龍宮	入	竹箭	解

注解

○1 河出崑崙山中 黄河は崑崙山中より流出している。崑崙は中國西方塞外にあるといふ山。西王母が住む處という。『河圖始開圖』「黃帝問風后曰余欲知河之始開風后曰河凡有五皆始開于崑崙之墟」(御覽六十二河三の張注)。「史記」三十三大宛列傳一而漢使窺河源河源出于真其山多玉石采來天子案古圖書名河所出山曰崑崙云(標點本)④漢書上張騫傳④同文張注一本)『山海經』海內西經十一「海內崑崙之墟在西北」(注)言海內者明海外復有崑崙山帝之下都崑崙之墟方八百里高萬仞四面有九井以玉為檻檻欄面有九門河水出東北隅以行其北西南又入渤海又出海外即西而北入海所導積石山(四叢下)『初學記』六河「水經注及山海經注河源出崑崙之墟」(詩解亦引之)『河圖』「黄河出崑崙山東北角剛山東以北流千里折西而行至於南山南流千里至於華山之陰東流千里至於植獲北流千里至於下津河水九曲長者入渤海(初六河九曲)」。『尚書』三禹貢夏書「浮于積石至于龍門西河導河積石至于龍門東至于砥柱又東至于孟津東過洛汭又北播為九河」(尚書古注三〇六下)○2 長波接漢空 黄河の立てる高い波が天空と接するように見える。晉木華『海賦』「洪濤瀾法汗萬里無際長波浩沓徒延」(注)善曰西京賦「起洪濤而揚波」(和刻本文選三三〇の)「漢天也言河以應天漢也」一本言地河連應天漢也(張注)昔黄河と天漢(天河)とは連っていると考えられた。○3 桃花生馬頰 桃花水が馬頰河

に主じる。桃花(水)は三月桃の花が咲く頃、水が融けてみなざり流れる水。馬頰(河)は古の

九河の一。河北省東光縣の北。交河縣の南(歴地唐49の4)。『尚書正義』六、夏書、禹貢「濟可、

惟克州、九河既道。(孔氏傳)河水分為九道。在此州界平原以北是。九河、徒駭(大史三、馬頰三、

覆釜、四胡蘇、五簡六潔七鉤盤八禹津九出、爾雅(孔穎達疏)李述曰、馬頰、河勢上廣下狹、狀如

馬頰也。大史、馬頰、覆釜、在東光之北、成平之南(阮刻二冊本49中)。兗州は山東、河北兩者に

またがる地。濟水と河水(黃河)にはさまれてゐる。『水經注疏』八、濟水二、濟水又北、分為下水、

其枝津西北出焉、謂之馬頰水者也。濟水又北、逕魚山、東左合馬頰水。馬頰水又

逕桃城東。馬頰水又東北流、逕魚山、南山即奇山也。其水又東注于濟、謂之馬

頰口也(77、78、注略之參照)。陳張正見九公無渡河、權折桃花水、飄橫竹箭水(初六河

賦)。駱賓王「送郭少府探得曼字詩」「開筵枕德水、繫棹纒仙舟、則闕桃花浪、龍門

竹箭前流(余唐詩卷八、砂)。貝闕は河伯(河の神)の居所、龍宮。『漢書』二十九、溝洫志「來春

桃李水盛、必表溢、有填淤、反壤之害(注)師古曰、月令、仲春之月、始雨水、桃始華、蓋桃方

華時、既有雨水、川谷冰泮、衆流猥集、波濺盛長、故謂之桃李水耳。而韓詩傳云、三月桃李

水。反壤者水塞不通、故令其土壤反還也。(標點本77、80。詩解)。○4竹箭前入龍宮、河水

が竹箭を流したように勢よく流れる。竹箭前は大きな竹と小さい竹。これを流すと矢のよ

うに勢よく流れるからいのであろう。『慎子』「河下龍門、流駛如竹箭、駟馬追之、不

及(御覽空36、77上。六帖河四、竹箭流99。水經注疏四、河水四、72。參照。詩解)。『山海經』西山經

二、竹山其下多高木。竹水出焉。北流注于渭。其陽多竹箭。箭、竹條也。(西叢3、70)。『水

經注疏』十九、渭水下、渭水又東與竹水合。水南出竹山。(注)楊守敬按、西山經。太平山、蒙

經注疏、十九、渭水下、渭水又東與竹水合。水南出竹山。(注)楊守敬按、西山經。太平山、蒙

宇記、竹山ハ在鄠縣西南一百四十里。竹水又名竹前合水。單沅曰、山在渭南縣東南四十里。俗名木木素
 嶺、亦名竹前合嶺（443中）。龍宮は龍淵宮であらう。『水經注疏』五、河水五「郡國志曰、
 河南有龍淵宮。武帝元光中、河決濮陽、汜郡十六發卒十萬人塞決河、起龍淵宮。」（注）
 守敬按、見漢書武帝紀六標點本の元光三年。蓋武帝起宮于決河之傍、龍淵之側、故曰、
 龍淵宮也（449）。②、初學記六、河龍宮引漢書武帝紀同文。張注。龍淵宮について武帝紀
 服虔注に「宮在長安西。作銅飛龍、故以冠名也」とする。○5、德水千年變、德水は
 千年に一度清む。德水は黃河の異稱。『史記』三八封禪書「昔秦文公出獵、獲黑龍、此
 其水德之瑞、於是秦更命河曰德水」（標點本五〇〇）。張注。詩解引漢書郊祀志略同。『易
 乾鑿度』「天降嘉應、河水先清、三日清變為白、白變為赤、赤變為玄、玄變為黃、各三百」
 初六河、三日變（444）。『壬子年拾遺記』「丹旆千年、燒黃河千年、清、皆至聖之君、以為太
 端、又黃河清而聖人生」（初六河、千年清（444））。○6、榮光五色通、五色のめでたい光が
 あまねくひろがる。榮光は五色の瑞氣。『尚書中候』「榮光出河、休氣四塞、休、美也。
 榮光五采」（初六河榮光（444）。張注一本。詩解。宋書符瑞志亦引之）。梁、江淹「脂、建乎上、
 書」方今聖曆欽明、天下樂業、青雲浮洛、榮光塞河。（注善曰、尚書中候曰、成土觀于
 洛河、沈璧禮畢、王退侯、至于日暎、榮光並出、塞河、青雲浮洛。銑曰、青雲榮光、皆河各之
 瑞也）（和刻本文選三九三の②）。駱賓王「晚渡黃河、詩」千里尋歸路、一草亂平涼。
 通波連馬頰、迸水急龍門。照日榮光淨、驚風瑞浪翻（全唐詩十九〇）。○7、若披
 蘭葉檢、還沐上皇風、もし蘭の葉に沐の文字にて書かれた河圖の文選をひらくこ
 とができるならば、上古に還つて黃帝の風になりたい。蘭葉はふじけかま（香草）の葉、これ

に河圖の朱色文字が書かれていたのであろう。ふじげかまは古くは蘭であるが、この小さな葉は文字が書かれていたか疑問である。あるいは檢(文函)の表に蘭葉朱文が書かれていたのであろうか。『河圖挺佐輔』「黃帝脩德立義天下大治乃為天老而問焉余夢見兩龍挺白圖以授余於河之都天老曰河出龍圖雒出龜書紀帝錄天其受帝圖乎黃帝乃被歷歷七日至於翠嬌之川大鱸魚抵溜而至乃饗天老迎之五色畢具魚汎白圖蘭葉朱文以授黃帝名曰録圖(藝土黃帝軒轅氏初六河魚折溜張注不示出典)檢は張注(全唐文一九〇、二〇〇)のこの文であれば蘭葉に龍圖(河圖)を載せてささげたことになる。『楚辭』三九歌雲中君「浴蘭湯兮沐芳華采衣兮若英」(四叢二四〇)

百詠和歌

河 河出崑崙論中、崑崙山の南に九井あり比皆玉の竹筒あり水丑寅の角より出て國のなかをながれて龍門を隔たり此故に河のみながみ崑崙山にありといへり浪のをも行す急とをく響くなりよ、いたえせぬ玉川の水

徳水千年變、黃河の一の名を九曲と云一の名を孟津と云り秦の文公の時黑龍終南山より出て水を臨てより黃河をあらためて徳水と云り黃河の水常に濁れり一石のみつをすましむるに一斗の泥をとるす(て二千年に一度すめり)はしめすまんとする水五

色に變す又聖人出るときこの水すむといへり
 水の色もまたすみやらすこのよいはかけやとす(き)人やなからむ

20 洛

- 1 九洛韶光媚
- 2 三川物候新
- 3 花明珠鳳浦
- 4 日映玉雞津
- 5 元禮期仙客
- 6 陳王觀麗人
- 7 玄龜方錫瑞
- 8 綠字佇來臻

校異

九洛に韶光媚びたり、
 三川に物候新なり。
 花は珠鳳の浦に明なり、
 日映玉雞の津に映ず。
 元禮は仙客を期し、
 陳王は麗人を觀る。
 玄龜方に錫を賜ひ、
 綠字佇來り臻る。

和 慧海

決決流不盡 決決として流水盡す
 千載綠波新 千載綠波新なり。
 開導自能耳 開導は能耳より、
 盤谷治近孟津 盤谷は孟津に近し。
 怨望後泊子 怨望して泊子を後ち、
 盛徳ト營人 盛徳として營人をたす、
 看看禹王世 看看たり禹王の世、
 龜圖祥瑞臻 龜圖祥瑞臻る。

洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛	洛
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川
三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川	媚	韶光	九洛	陽	三川

8.	7.	7.	7.	6.	6.	6.	5.	5.	5.	4.	4.	4.	3.	3.	3.	2.	2.	洛
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	珠鳳	花明	新	物候	峨
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	珠鳳	花明	新	物候	沈
																		英
																		華
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	珠鳳	花明	新	物候	陽
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	珠鳳	花明	新	物候	存
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	張
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	注
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	慶
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	長
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	凌
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	草
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	陽
綠字	錫瑞	方	玄龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	丙
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	王
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	家
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	全
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	唐
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	陽
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	中
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	和
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	李
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	李
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	巨
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	詩
綠字	錫瑞	方	神龜	麗人	觀	陳王	仙容	期	元禮	津	玉雞	日映	浦	丹鳳	花明	新	物候	解

<small>洛陽</small>	<small>洛底</small>	<small>漢華</small>	<small>陽</small> (<small>名</small>)	<small>張存</small>	<small>張注</small>	<small>慶長</small>	<small>淺草</small>	<small>陽</small> (<small>名</small>)	<small>平</small>	<small>六家</small>	<small>金唐</small>	<small>陽</small> (<small>名</small>)					
來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻
<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>
來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻	來臻
<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	<small>來臻</small>	詩解

○二延寶版本「丹作珠」(詩解)。 ○三「仲」作「仲」。今從延寶版本「詩解」。

法解

○一九洛韶光媚 洛水から龜が書を背負って出て來に。背には九列の文字が書かれており、春ののどかな陽をあびて美しい。

九洛は九疇洛書の意。九疇は洛水から現われた神龜の背に九つの列があり、九類のことや書かれていた。圖参照。『尚書』七、洪範六「天子錫禹洪範九疇。舜倫攸叙。(孔安國傳)天與禹洛出書。神龜負文出。列於背。有數至九。禹遂因而第之。以成九類。常道所以次叙。初、一曰五行。次二曰敬用五事。次三曰農用八政。次四曰協用五紀。次五曰建用皇極。次六曰又用三德。次七曰明用稽疑。次八曰念用庶徵。次九曰嚮用五福。咸用六極。』(古注尚書、下、卷下)。『莊子』五、天運下四「九洛之事、治成德備。緊照下下。天下戴之。此謂上皇。唐成去異疏。九洛之事者九州聚落之事也。』(古逸叢書本叢新註下) 疏によれば九洛は九州(禹貢にいう中國)に莊子翼に引く所の呂註では洛書九疇とする。この詩は洛水を詠じているので、洛書九疇の例と考えておく。張注は次の九つの洛を示す。『華洛、温洛、河洛、伊洛、

灑洛上洛繩洛穀洛泥(天理本作記)洛也」とする。三川に對する九洛であるので理解できらるが、その根據がけつきりしない。この中、繩洛は綿洛かも知れない。泥洛は不明。ただし、温洛や河洛等説明のつく例もある。『易乾鑿度』「帝盛德之應、洛水先温、九日乃寒。」(初六洛水、九日温也)。『文心雕龍』「正緯四」贊曰「榮河温洛、是聖圖緯。」(枝法學術名著)。梁任昉「九日侍宴樂遊苑詩」時來濁河變、瑞起温洛清。(藝四九月九日)。『周易』七、繫辭上「河出圖、洛出書、聖人則之。」(古注尚書七卷、四)。韶光(一作韶)風光。參考、唐、尚宮宋氏若昭「秦和御製麟德殿宴百僚應制詩」德炳(一作立)韶光熾(一作被)思(一作沾)雨露濃(一作全唐詩七卷)佛中(一作媚)コ(一作ラツクシ)。

〇三川物候新 洛水の三つの川のありさまはあざやかである。

三川は諸説あり。張注は河、洛、伊とする。また『混天圖』「三川、秦川在荊州、洛川在河南、蜀川在益州」(張注)。『周官』「豫州其川、棗洛、與伊、灑、二水爲三川、秦於河南、置三川郡」(初六洛川也)。『史記』五、秦本紀「初置三川郡」(注)集解、章昭曰「有河、洛、伊、改曰三川」(標點本)の。『同周本紀』四「幽王二十一年、西周三川皆震」(注)集解、徐廣曰「涇、渭、洛也」(標點本)の。いずれの説も洛水と連絡のある河水系の河であり、河水かを決しかねる。『白氏六帖』(洛四十五)では三川を伊、洛、灑とする。『魚豢典略』「洛與伊灑二水爲三川」(詩解)。劉宋、魏延之「北使至洛詩」「前登陽城路、日夕望三川」(注)善曰「漢書曰、汝南郡有陽城縣、音義應劭曰、三川、今河南郡。章昭曰、有河、洛、伊、故曰三川也。銳曰、即洛陽也」(和刻本文選三七の、下②)。以上の例から陽城から見渡せる位置にある河水、洛水、伊水を李嶠は三川と考えていたと思える。○物候は氣候風物をいふ。盧照鄰「元日述懷」作「明月引」。「人歌」小歲酒。

花舞ハナマユ大唐春大唐春草色迷草色迷三徑三徑風光動風光動四鄰四鄰願得長如此願得長如此年年物候新年年物候新（全唐詩四三〇）。駱賓王「早秋出塞寄東臺詳正學士」小川殊物候小川殊物候風壤異涼暄風壤異涼暄（全唐詩七九〇）。風壤は風景と土壤、涼暄は涼しいことと暖いこと。楊炯「登祕書省閣詩序」平看日月平看日月唐都之物候唐都之物候可知可知坐望山川坐望山川非衣秀之樂圖非衣秀之樂圖在在（全唐文二九〇）。非衣秀は魏晉の人。「禹貢地域圖」八篇を著す。いま「非衣秀禹貢九州制地圖論」（漢唐地理書鈔）藝文地藝文地より輯書〇〇中華書局）に残卷あるのみ。

○3 花明珠鳳浦 花は珠のように美しい鳳凰の下り立った洛水の濱邊に照り榮える。

珠鳳は張注以下丹鳳とする。珠は玉雞の玉と對應する。張注は伊水を丹鳳浦とする。一本、神仙傳曰周靈王太子晉吹笙洛濱感鳳飛去故號伊水曰丹鳳浦也（張注。今本不見）。列仙傳「王子喬、周靈王太子晉也。好吹笙作鳳鳴遊伊洛間。道士浮丘公接上嵩高山」（藝文高山。初六洛笙鳳鳴。詩解）。詩解はこの（故事）によって浦としたといふ。「宋書」三七、符瑞上「黃帝黃龍齋於中宮坐於玄扈洛水上有鳳凰集」（斷句本三三〇下。初六洛鳳集。張注）。梁簡文帝「漢高廟賽神詩」白雲蒼梧去白雲蒼梧去類聚注上。文苑同。丹鳳丹鳳類聚注霞類聚注霞咸陽來咸陽來。

○4 日映玉雞津 日は玉雞の津に光りかがやく。

玉雞は漢の高祖の母合始が洛池に遊んだ時玉雞が赤珠をくわえているのを見、これを吞んで高祖を生んだといふ。「帝王世紀」昭靈后名合始遊於洛池有玉雞啗赤珠刻曰玉英刻曰玉英赤此者王赤此者王合始吞之合始吞之生漢祖劉季生漢祖劉季（初六洛水玉雞。張注。詩解）。初學記において玉生鳳（3所引劉向列仙傳）と對になっており、3の珠鳳は玉雞に對應していること

いなる。3. 4句の典據が『列仙傳』の王子喬の故事と『帝王世紀』の玉雞の故事である
と考えられる。『帝王世紀』と同じ故事は『宋書』三七、符瑞志上（斷句本92頁上）にも見える。

孫柔之『瑞應圖』「玉雞瑞氣也。王者至孝合神明則至。」（白氏六帖下九雜、玉雞、玉函出房輿佚
書、玉行類287下④）。『水經注』十五、洛水「昔王子晉好吹鳳笙、招延道士、與浮邱、同遊伊洛之
浦、合始又受玉雞之瑞于此水、亦洛神宓妃之所居也。」（注疏177中）。

○5 元禮期仙客 太子元禮は郭林宗と期り（洛水に舟を浮べて遊ぶ）。

李膺（字元禮）と郭太（字林宗）の故事。『後漢書』六八、郭太列傳「太一游於洛陽、始見河南
尹李膺、膺大奇之、遂相友善、於是名震京師、後歸鄉里、衣冠諸儒送至河上、車數千兩、
林宗唯與太子膺同舟而濟、衆賓望之、以為神仙焉。」（標點本225頁、張注、詩解、日蒙求100、李郭
仙舟、日氏六帖、洛水、仙舟亦引之、郭林宗別傳、藝文、舟、227、參照）。

○6 陳王觀麗人 陳思王曹植は洛水の麗人を目の邊にする。

魏の曹植が洛水のはとりにて洛神宓妃を見たとする故事。麗人は高貴な美人。曹植「洛神賦」
「容與乎揚林、流盼乎洛川、於是精移神馳、勿爲異散、俯則未察、仰以殊觀、一麗人于巖
之畔、爾迺擲御者而告之曰、爾有艷於彼者乎、彼何人斯、若此之豔也。」（注、向日、觀見豔、美也、
御者、對曰、臣聞河洛之神、名曰宓妃、余告之曰、其形也、翩若驚鴻、婉若游龍、（和刻本十
九頁下、張注、詩解引同賦曹子建注）、水經注參照175）。

○7 玄龜方錫瑞 ちようど玄龜が天の瑞祥の書を背負って洛水より現れる。

玄龜は洛水より洛書を背負って出て來た大龜。『尚書』洪範の引用文參照。劉宋沈
約『宋書』「玄龜洛書者、天付也。王者德至川泉、則洛出龜書、（初、洛水、玄龜出）。

沈約『宋書』二十七符瑞志上「堯…率羣臣沈璧於洛禮畢…赤光起玄龜負書而出背甲赤文成字止於壇」(斷句本三七七、370下。張注)。「尚書中候」堯沉璧於洛。玄龜負圖出北甲赤文成字止壇」(初六洛水堯壇37)。「錫」賜也通用字。「爾雅」釋詁「一賚錫賜也皆賜與也」(南代朝刊本上166。汲古影印本)。

○8 綠字佇來臻 待ちに待った神龜が綠字のめでに洛書を背負ってやって来た。

綠字は綠の字で書かれに洛書の符瑞。佇はのぞみまつ意レヤつとしたまはまとなつたものなり。佛上8「個タマ」佛上8「儻カマクシマサカ」佛上8「偶タマサカタマ」(同8)。

佛上8「佇マツネカフノソム」淺草文庫本の訓みに従うか。「晉書」十四地理志上序「昔大禹觀於濁河而受綠字」(斷句本33の27)。「淮南子」二、傲真訓「古者至德之世…洛出丹書、河出

綠圖」(四叢二はりの)。「水經注」十五洛水「黃帝東巡河過洛脩壇沈璧受龍圖于河」(龜書于洛赤文綠字)(熊會貞疏)開元占經二百下「孔作河出龍圖赤文綠字以授軒轅」(注疏130)④。上の文「宋書」三七符瑞志上「龍圖出河龜書出洛赤文篆字以授軒轅」(斷句本30上。四叢同文)となつてゐる。綠と篆字は似ている字體であり、同書に「榮光出河」乃有龍馬

銜甲赤文綠色」(三七44、39下)とあるのと考へ合わせると篆は綠が正しいように思へる。臻は至と通用字。「爾雅」上釋詁「一迄臻…至也」(南代朝刊本上166)。

百詠和歌

洛元禮期仙客、後漢の李應か字は元礼といへり郭林宗洛陽にきたりあそふ元礼ねんころにかたらしむすひてとるに文談をなす後に郷里に歸るとき元礼と林宗とひとつあねのりて河上に浮へり 諸の儒士衣冠をばしうしてこれをおくる人神仙なりとほめけり

陳王觀麗人ヲ 魏武帝第三の子曹樹洛神賦云我京城より東蕃にかへるみちのいはほのほとりにひとり麗人をみる 御者をひきてとほしむるに 河洛の神名を宓妃と云りこ
 水を見るに 髣髴たる事かろき雲の月を隠か如し 飄飄たることなかる 風の雲をめぐらす
 かことし 遠く望めは日の光の朝の霞いのけるかことし 近くみればちすの色のみとりの浪
 よりいつるか如し あるときは清流にたはふれ ある時は神渚にかける あるときは明珠を
 とり あるときは翠羽をひらふといへり

山姫のかすみの袖にあくかみぬ風にひれふるあけけの雲

和李嶠百千詠補注

山 全唐詩系の本文に對應して作詩されている。

〇ノ 秀氣は神秀に對應。杜甫「天池詩」鬱紆纒秀氣 瀟瑟浸寒空（九家集注杜詩三二）。秀氣は山水の秀麗の氣。〇之奇形は山水の並でない形。上官昭容「遊長寧公主流杯池」千五首之十六「泉石多仙趣 巖壑寫奇形」（全唐詩五〇）。紫氣はむらさき色の雲氣。李白「贈郭秀鷹詩」一擊九千仞 相期凌紫氣（李太白集八〇外卷嘉堂本）。〇ノ萬壽 山の甚だ高いさま。晉愨康「琴賦」丹崖嶮巖 音壁萬壽（注良曰丹崖並 山色 壁 石壁也 嶮巖 傾側貌也）（和刻本文選六四〇）。 萬壽は雲か目をおおうさま。〇汝書三七下之上 五行志「白雲如山行散」日標點本。李白「答杜少府五松山見贈詩」浮雲蔽白日 去不返 抱石為秋風 摧紫蘭（李太白集十一外卷詩）。〇ノ半岫は山の中腹にある洞。こゝから雲が出るという。半天に對應する。劉兼「對雨詩」半岫金鷄鏡 委照一丁川（本行）石燕又交飛（全唐詩六六〇）。 生雲は山の岫から雲を生ずること。杜甫「假山詩」一望中疑在野 揚塵欲生雲（九家集注杜詩一七）。〇ノ霞彩 美いろいろのやすみ。許道衡「重酬楊僕射山亭詩」一朝朝散霞彩 暮暮澄秋色 秋色遍亭蘭 霞彩落雲端（隋詩四〇）。〇ノ秋楓は秋に紅葉したかえて。李咸用「廬山詩」秋楓紅葉 非蝶散 春石谷雷奔（全唐詩六五〇）。〇ノ瑤瑟 美しく

裝飾を施した器。稷丘君の持つていた琴瑟であらう。李白「聞母孀子於城北山營石門出居中。有高鳳遺跡。僕離羣遠懷。亦有棲遁之志。因敘舊詩。一松風清。落葉。溪月。甚芳樽。」李白文集上卷。〇〇稷丘君。前漢の道士。列仙傳。「稷丘公者。太山下道士。漢武帝東巡狩。乃冠章甫。衣黃衣。擁琴來迎。帝曰。勿上。必傷指。帝上。左指折。為丘公立祠。」初三三道士稷丘也。

石鼓

〇一鼓鳴石鼓が鳴ること。博洽は廣く物を知っていること。古老のこと。「華山記」華山頂有石鼓。父老傳云。嘗有聞其鳴者。初五華山石鼓。〇二化羊立白石が起るより羊になつたという故事。葛洪「神仙傳」黃初平者。丹溪人也。年十五。牧羊。有道士便糲至。金華山。其兄初起。行索初平。歷年不得。見市中。有道士。乃隨求弟。相見。詰畢。問羊何在。平曰。羊近山東。兄往視。但見白石。平言此羊起。於是自左右起。成數萬頭。羊。初平九羊。叱石。藝。九羊。昔初平作皇初平。〇三雨淋。零陵の石鼓は風雨を得て飛ぶといふ。作燕は石にて作られた燕の意であらう。注解参照。〇四餘醒。あつがよい。劉禹錫「和牛相公題姑蘇所寄太湖石兼寄李蘇州詩」煨熟近還散。餘醒見便醒。全唐詩三三。〇五子荆語。蒙求。「孫楚激石。晉書。孫楚字子荆。才藻卓絕。辭遒不群。初楚少時欲隱居。謂王濟曰。當欲枕石漱流。誤云激石。枕流。濟曰。流非可枕。石非可激。楚曰。唯以枕流欲洗其耳。所以激石欲厲其齒。除注本。世說。排調亦見之。〇六激言機。さとり深く機智のあること。韻の關係により機言を前句させた。「三國志」魏書。武帝紀「太祖少機警。有權數。而任俠放蕩。標點本の。」

中原

〇四塚上放牛賦。これを胡地で死んだ王昭明君の故事とするれば。沙漠の中の昭君墓のみが青い草が生えていたという「青塚の話になる。この墓上で牛が草を食べていたことにするが。このはあい牛ではなく羊であらう。「事文類聚前集」王官身「畫王昭君。王嬙字昭君。王穉好漢。元帝時。匈奴入朝。詔以昭君配之。號寧胡閼氏。後昭君服毒死。攀國葬之。胡中。胡地自草。而此草獨青。故曰青塚。」和刻本三二。〇五これは話として面白いか。次の故事が適當している。「事文類聚前集」三八。墓「牛眠得葬地。晉周訪微時。與關侃結交。侃。艱家中。忽失牛。遇一老夫。曰。前崗見一牛眠山。跨中。其地若葬。位極人臣。侃尋牛得之。因葬其母。」和刻本三二。〇六離離草。草原に草が繁盛しているさま。白居易「賦得古原草送別詩」離離原上草。一歲一枯榮。野火燒不盡。春風吹又生。那波本白氏文集上卷。〇七漢漢田

王維「積雨輞川莊」有「上字作」一作「秋歸輞川莊」一作「漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木囀黃鸝」(全唐詩三
卷)。漢漢田口水田の稻が色濃く繁っているさま。○7 王昌齡「從軍行三首之三」青海長雲暗雪山、孤城遙望
玉門關(唐詩選で絶)。長雲に長くにまびいた雲。○8 賈島「暮色」夕暮れの暗くなりかけの景色。劉宋謝靈運「石壁精舍還湖中作」詩「林壑歛暝色、雲霞收夕霏」(注)善曰霏雲飛貌。濟曰霏日氣也。時既暮故收歛也
(和刻本三九〇頁)。

14 野

○9 柳宗元「江行記」水林茫といえげ水がはてしなくひろがるさま。荒野に手入れされず荒れに野原。傳玄「明
君篇」蘇武出荒野、萬里升紫庭(樂府詩集五十三卷校點本)。○2 草色接晴空、草のみどりと空のあわが
つの色にとけあうこと。感覺的には次の句が参考になる。李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵詩」孤帆遠影碧空盡、惟見長江天際流(唐詩選七七絶、集作碧山)。○3 狐兔、狐兔しか通りぬ寂しい所の意。魏曹植「大
山梁甫吟」梁甫何蕭條、狐兔翔我宇(藝聖一論樂例)。○4 輪蹄、車馬をいう。○5 月來月のめぐり。
韓愈「北樓詩」晚色將秋至、長風送月來(全唐詩三四三〇九)。寒霧、晚秋から冬にかけての霧。太子益「水
亭夜坐賦」得曉霧詩「月落寒霧起、沈思浩通川」(全唐詩三三三〇)。○6 落霞、晚霞をいう。許敬宗「秦
和秋日」一作月即日應制詩「昆明秋景淡、岐岫落霞然」(全唐詩三三三〇)。○7 千古、千年。蒼梧は注解
了參照。尹廷高「會稽古陵詩」五陵王氣有時盡、萬里中原無日歸、牧豎亡羊千古恨、九疑山下
漁衣(玉井樵唱元詩選甲集卷)。○8 依依、思しいさま。錢起「江行無題」百首「一作錢明詩之八十四」江流
何渺渺、懷古獨依依(全唐詩三三九〇)。

15 田

○7 村夫、農夫をいう。唐李義山「雜纂」「難容、僕妾穢言語、武人村夫學字語」(叢新三〇三)。就田
口田耕に就くこと。白居易「得袁相書」穀苗深處「農夫、面黑頭斑、手把鋤、何意使人猶識我、就
田來、送相公書」(那波本十四卷の上)。○2 杜鵑、鳴月辰、農家では夏になって農事をすむに當り、杜鵑
の鳴き聲を聞いて決めたという。○本「草綱目」四十九、杜鵑「集解」春暮即鳴、夜啼、遠望、鳴必向北、至夏
尤甚、晝夜不止、其聲哀切、田家候之、以興農事(備文版下)。辰は晨と通用字。あした。○3 決渠、田
畑に水を引くために作ったみぞをひでうの時切り開いて田をいそぐ。蘇軾「次韻孔毅父久旱喜雨而喜雨三
首之三」明年共看決渠雨、饑飽在我寧關天(和刻本王狀元集諸家註分類東坡先生詩文集卷五版)。○鴨

頂は鴈の緑色の頭、これが水のみどり」といひあつて浮んでいるさま。白居易「新春江次」鴈頭新緑水。鴈齒小紅橋。(那波本卷三七)。鴈齒は朱塗すの橋が細かく並んでいるさま。○4分敵は白のうねが規則正しく並んでいるさま。分眈、分眈、分眈の類。唐考謙「西明寺威公盆池新給詩」蓮盆積潤分眈小藻并垂陰。攢秀極。(全唐詩卷二七)。盆池は庭の小さい池。蓮盆は蓮の生えている盆池。攢秀、稲がよく伸びていること。田豐魚鱗とけ敵のようす。魚の鱗を並べたようだの意。布龍鱗に對す。王勃「出峴遊山」二首之一「峯斜連鳥翅。磴疊上魚鱗」(全唐詩卷六)。磴は山に登るための石段。文同一采芡詩「濃藍團團開碧輪。城東壕中如鹽鱗」(丹淵集鈔)。宋詩劍。芡はおぼにばす莖や實を食す。○春後(け春の終、晚春、この頃莖が實る。趙嘏「遣興」二首之一「淡花入夏漸稀疏。雨氣如秋麥初熟」(全唐詩卷九)。○6秋來(秋になつて。李商隱「席上作」淡雲輕雨捲高唐。玉殿秋來夜正長。全唐詩卷九)。○8佞役(公のために義務づけられるに勞働。えだち。韓非子「備内」一「佞役多則民苦。民苦則權勢起」(稟解學術名著略)。○8輸(ほとこし、送り物と譯したが、語義の解釋に疑問あり。あるいは輸賦、賦税を納める意か。

16道

○1來往は行き還り。白居易「獨作寄胡之詩」里巷千來往。都門五別離。岐分兩回省。書到一開眉。(那波本卷九)。○千里(遠い道の)。劉宋鮑照「還都道中詩」三首之三「夕聽江上波。遠極千里目」(宋詩八)。藝至と行旅題。還都在路詩。○2臨波(波に道に立って人を送る。杜甫「送梓州李使君之任」不臨波。恨唯聽。琴最光」(九家集注杜詩卷五)。○3心孔(心が痛む。臨と邛を組み合わせて洒落たものか。臨邛は本詩と参照。なお上の杜詩を意識して賈島の作がある。「送陳府王司馬詩」杜陵惆悵臨邛。一作波。錢。未渡月前多癡。唐賈浪仙長江集九。四叢。全唐詩卷四。杜陵は杜甫を指す)。○3春松(秦始皇帝が泰山に登った時封じたという五本の松。し松の風拂大夫枝「漢官儀」秦始皇上封太一。山逢疾風暴雨。飄得松樹。因復其道。封為大夫松也(藝文、松樹)。○4青蓋(青い笠の形をした松。「抱朴子」玉葉記「千歲松如偃蓋」(初之、松偃蓋)。○4隋柳(隋の煬帝が河岸を修築し柳を植えた。これを隋堤と稱した。「隋書」煬帝自板渚引河。築街道。植以柳。名隋堤。一千三百里。隋堤類函四五。楊柳隋堤。○6)太宗皇帝「春池柳詩」一年柳變池臺。隋堤斷直回。初天柳。年柳は柳の老木。同一賦得臨池柳詩「岸曲綠陰聚。波移帶影疎」(淵鑑類函四五。楊柳類函四五。楊柳隋堤。同一賦得臨池柳詩)。*隋書「二十四食貨志」又自板渚引河。達于淮海。謂之御河。河畔築御道。樹以柳。斷句本三四。唐詩同。事文類聚後集三。隋堤柳(和刻本卷三)に類函とほば同文字れと出典を示す。○6征鞍(征途にある軍馬の鞍。李商

隱一偶成轉韻于二句體四同合。一征東同合鴛鴦與鸞酒酣觀我縣征鞍（全唐詩四〇〇）。〇八尺龍八尺以上の馬を龍馬といふ。注解6引。附禮。參照。

17海

〇7俯仰は上下を見回すこと。渺無限とははてしなくひろがっているさま。梁簡文帝（藝類彙作晉庾闡）「海賦」「素波木鬱。測之歎而無際。望之溢而綿漠。」（初六海）。〇2天低波浪微。天が水面近くまで低れ、海はさざなみ波を下っている。白居易「東南行一百韻」「地遠窮江海。天低極海隅。」（那浪本云云）。〇波浪微波浪が小さな波を立てていること。章法「題頴源廟」「微波乍向雲根吐。去浪遙衝雪嶺橫。」（全唐詩九六〇）。〇3二山仙關遠。二山に法解3。〇仙關は仙人の住居。「史記」三八封禪書「燕昭使人入海求蓬萊。方丈瀛洲。此二神山者其傳在勃海。求去人。不遠。輒此則至。則船風引而去。蓋嘗有至者。諸仙人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白。而黃金銀為宮闕。未至望之如雲。及到三神山。反居水下。臨之風輒引去。終莫能至。」（標點本三八四）。三山の仙關が遠いというのには近づき難いことをいふ。〇4九嶷歎。海中の洲をいふ。四海を九嶷といふの嶋嶼。沈懷遠「南越志」「海安縣南有小山。南注于海。極日。峯巒。渺望深波。」（初六海。倉嶷也）。「初學記」「海一凡四海通謂之禪海。既及禪海外。復有大瀛海環之。郭子曰。所謂中國者。凡見有九州。禹之九州是也。不得為州數。中國水地亦與州在。亦謂之九州。有禪海環之。如此者九。都有大瀛海環。其外此謂之九嶷。」こゝにいう中國の九州の外の禪海にどうまかれに九州（九つの嶋）と九嶷とする。瀛海は大瀛海。〇5魚龍怪。怪魚。巨龍の類。晉木華「海賦」「吐雲霓。含龍魚。隱鯢鱗。激靈居。」（注善曰。淮南子曰。四海之靈。泰鯢鱗或為昆侖山。昆侖山方壺之屬也。靈居。衆仙所處也。良曰。霓。紫雲也。鯢。大魚名。木數十里也。靈居。謂方丈三神山。仙居。其屬則為天瑤。水怪。蛟人之室。取石。論。鱗。申。異。靈。也。注善曰。天瑤。自然之室也。水怪。奇石生乎水濱也。鯢曰。蛟人。龍屬。人狀。居於水底。」〇6吐吞日月輝。明月珠すなわち蚌珠（真珠）をいふ。東方朔「神異經」「西北荒中。有二金闕。相去百有八。有明月珠。徑二尺。光照千里。」（初三。珠。照金闕也）。この例に月の光を受けてできたとする。真珠。明田汝成「西湖遊覽志」「北山勝蹟。上太玄寺。晉太福。開僧道。踈結庵山中。一夕見瑞光。發於前洞。既視之。得奇木。刻畫觀音大士像。」南渡時。捨施珍寶。有日月珠。鬼谷珠。貓睛等。（光緒廿二年四月。嘉善堂重刊本）。〇7桑田曾幾變。桑田がいつの間にか海に變る。時勢の變轉の激しさに喩えられる。葛洪「神仙傳」「麻姑謂王方平曰。自接待以來。見東海三為桑田。向別蓬萊。水乃淺於往者。昭乎也。豈復將為陸地乎。方平乃曰。東海行復揚塵耳。」（初六海。桑田）。〇8衆流歸。注解8。吳都賦。參照。

18江

○ノ長江杳無限長江が際限なくひろがりのびているさまをいふ。王孫王孫自荆湖入朝王孫自荆湖入朝至岳陽奉別張燕公至岳陽奉別張燕公一遠樹煙間沒遠樹煙間沒長江北際遙長江北際遙全唐詩九八〇。劉宋鮑照劉宋鮑照益城賦益城賦灌莽杳杳而無際灌莽杳杳而無際叢薄紛其相依叢薄紛其相依注善。廣雅曰灌叢也。向日水草雜生曰灌莽也。杳杳遠貌杳杳遠貌和刻本文還上二〇〇〇。王維臨高臺送黎拾遺臨高臺送黎拾遺一相送臨高臺相送臨高臺川原杳杳被川原杳杳被全唐詩三八〇。○ノ小艇小舟。白居易池上二絶之一白居易池上二絶之一小艇偷投日蓮迎小艇偷投日蓮迎那波本云云の理。○二三回小舟ガ二二三回小舟ガ二二三回取って來るともとれる。○波上烟光合波上烟光合李端詩の霞津と錦浪に對應している。烟光をかすみの光とする例もある。李白一觀元丹丘坐李白一觀元丹丘坐巫山屏風巫山屏風一水石濕澗萬壑分烟光水石濕澗萬壑分烟光草色俱氳氳草色俱氳氳靜嘉堂本李太白文集三五〇。○激聲黃牛灘の石に水がぶつかり發する音。注詳參照。山隸之南徐州記山隸之南徐州記一京江南黃北江也關漫三十里京江南黃北江也關漫三十里通津木壑常以春秋朔望輒有大濤聲勢駭壯極為奇觀通津木壑常以春秋朔望輒有大濤聲勢駭壯極為奇觀濤至江北激赤岸尤更迅猛濤至江北激赤岸尤更迅猛初六江激赤岸。○登影自馬江の澄んだ水面に白馬の影が濤となって映らる。注詳參照。○ノ擊楫中流志擊楫中流志遙懷祖述才遙懷祖述才晉の祖述が舟のかいを擊つて天下平定の志を示した故事による。晉書三二三祖述列傳一渡江中流擊楫而誓曰祖述不能清中原而復濟者有如大江辭色壯烈衆皆慨歎標點本〇。

19 河

○ノ星河星河黃海の水源を青海省にある星宿海星宿海という濕地だと考えられていた（歴代唐ノカ）。宋史九一、河渠志宋史九一、河渠志黃河上黃河上太元至元三十七年我世祖皇帝命太元至元三十七年我世祖皇帝命學士蒲察萬質學士蒲察萬質西窮河源始得其詳西窮河源始得其詳今西番架拔思納今西番架拔思納嶺曰星宿海者其源也嶺曰星宿海者其源也四山之間有泉近百流匯而為海登高原之四山之間有泉近百流匯而為海登高原之若星宿布列故名若星宿布列故名標點本〇。○洋洋盛んに水の流れるさま。毛詩三衛風碩人毛詩三衛風碩人一河水洋洋河水洋洋北流活活北流活活傳傳洋洋盛大也洋洋盛大也活活流也活活流也古注の注。○碧空あおぞら。漢空に對す。○狂瀾波荒流狂瀾波荒流狂。韓愈一進學解韓愈一進學解一障百川而東之障百川而東之迴狂瀾於既倒既倒古丈真寶後二。○砥柱禹が黃河の流れを良くする下めに山を破って通した。その左右に壁立する山。水經注四河水一又東過砥柱間水經注四河水一又東過砥柱間砥柱山名也砥柱山名也昔禹治洪水昔禹治洪水山陵崩水者鑿之山陵崩水者鑿之故破山以通河故破山以通河河水分流包山而過包山而過山見水中山見水中若柱然故曰砥柱也若柱然故曰砥柱也河水東流貫砥柱河水東流貫砥柱隔斷流隔斷流今世所謂砥柱者蓋乃勝流也今世所謂砥柱者蓋乃勝流也自砥柱以下自砥柱以下平戸已上其間一百二十里平戸已上其間一百二十里河中鍊石不出河中鍊石不出勢速襲陸勢速襲陸蓋亦禹鑿以通河蓋亦禹鑿以通河疑此關流也疑此關流也其山雜亂尚橫其山雜亂尚橫激流激石雲洞激流激石雲洞激湍激湍激湍激湍合有二十九灘合有二十九灘水流迅急水流迅急勢同二成勢同二成砥柱舟楫自古所患自古所患注疏四遊一〇。歴代東漢傳の〇。○疾雷疾雷冬のわや。龍宮注解四參照。○奔波急流をいふ。○濁った黃河が千年に一度清み聖人の御代に過うこと。法解五王子年拾遺記法解五王子年拾遺記參照。○六奔波急流をいふ。○九曲黃河が九度大きく曲り渤海に流入すること。河圖河圖黃河出崑崙崑崙山東北角剛山東以北流千里

折西而行至於南山南流千里至於華山之陰東流千里至於植麻北流千里至於下津河水九曲長者入于渤海初六河九曲○7 洛水 洪水水が逆卷り流れる。『書經』大禹謨「帝舜曰來禹洛水獻功成凱成功惟汝賢」宋蔡沈傳「洛水洪水也古文作降王季子曰水逆行謂之洛水」書經集傳「洛水名著諸本洛字降作韻府作洛水作降」。

20 洛

○7 泱泱洛水の水の深く廣いさま。『毛詩』十四 甫田序「泱泱洛矣維水泱泱」傳「泱泱深廣貌」鄭箋「瞻視也我視彼洛水濯漑以賦其澤深潤以成嘉穀」古注「西伯上」。○8 緑波 緑色の波。魏曹植「洛神賦」一河洛之神名曰宓妃遊而察之灼若芙蕖出緑波和刻本文選十九の如也。緑波は清い波。慧海はこれを緑波としたと考えられる。又選諸本緑波とした例未詳。深江淹字文通恨賦「春草碧色香木暎波和刻本文選十九の如也」。清河焯著奉勅撰「分類字錦」ハ山水一春水緑波一河洛別賦春草碧色香木暎波。○9 には緑波とする。江戸時代に流布した「新刊校正文園機活法詩學全書」四、水一起句「緑波」明王世貞校明曆三刊20の⑨にもすでに緑波の例が見られる。この詩の作者慧海に限らず卑近簡便な類書、詩の作法書類が使われていたと考えられる。○3 開導自熊耳 高が洛水を開鑿して熊耳山より潤澤に合流させる。『尚書』三 夏書「導洛自熊耳在首陽之西東北會澗澤會于河南城南」古注三、陸。陸地戰國の如く。○4 敷鑿治近于瀝津 洛水を開鑿治水して河水の孟津の近邊まで導く。『尚書』三 夏書「高貢」導河積石至龍門。地以通流。又東至子玉。漢津地名在洛北。東過澗澤至子玉。洛水入澗處。古注三、陸。陸地戰國の如く。○5 怨望復瀉子 怨望は洛水で溺死した宓妃がうらめしき心で河の曹植を待ち望む意。魏曹植洛神賦「余朝京師還濟洛川古人有言斯水之神名曰宓妃」注論曰京師洛陽也還還還張丘也斯水洛水也。和刻本文選十九の如也。周禮「雍州其川洛洧」名漆澗出焉。此職輸之水非河南洛水也。初古洛水也。ここにいう洛水は北洛水、漆沮水ともいう。渭水と合流して黄河に注ぐ。河はこの地點にあり、曹植が神女に會った所（陸地商の如く）。瀉という地名あり。洛水の河水黄河に流入する意からの命名。○6 盛徳一完全が徳を以て周公は洛邑を經營し、洛邑が都に過しているというトの結果を使を遣わして成王に報告した。『尚書』正義「十五 洛誥」周書「召公既相宅周公往參成周使來告」孔氏傳「召公先相宅」又周公自後至洛造之遺使以所卜吉兆逆成王。一既刻本三冊本。周公が洛邑に止りこの地を經營するに至ったことを詩では詩人を下すと表現したものであろう。武王の始めて營んだ都（宗周）は鎬京といひ、長安の西南に位置し、西都ともいった。トでは洛邑とせ水を經營する人（周公）をトつたと解釋した。○7 看看よく見よの意。王政治然「耶溪泛舟」

15	田賦賦池底	成贊	冥華	陽己	佚存	表法	慶長	溪草	陽昌	晉	大家	唐詩	全唐	陽昌	和	李巨	詩解
14	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
13	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦	作賦
12	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨	晨
11	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟	鳳吟
10	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉	菖葉
9	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥	瑞麥
8	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾	嘉禾
7	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗	九穗
6	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝	銅駝
5	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵	抵
4	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微	紫微
3	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽
2	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽
1	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽	堯樽
1	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑	丹壑
2	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山	三山
3	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲	巨鰲
4	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里
5	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬
6	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬
7	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里
8	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬
9	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里
10	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬
11	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里
12	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬	犬鵬
13	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里
14	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬	大鵬
15	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里	萬里

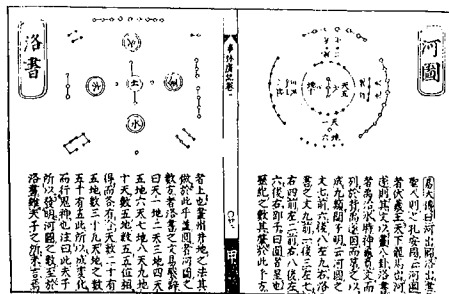
別表Ⅱ

石	石	石	石	石	石	石	石 ¹²	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山 ¹¹		
8 ₂	8 ₁	7 ₂	7 ₁	6 ₂	6 ₁	5 ₂	4 ₂	3 ₂	3 ₁	2 ₂	2 ₁	1 ₂	1 ₁						
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	漢	
A	B	A	A	A'	A'	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	B	沈	
							A	A	A'	A	A	B	A	A	A	A	C	成	
D	B	A	A	A'	A'	A	A	A	D	A	D	B	A	A	A'	A'	D	庚	
A	B	A	A	A'	A'	E	A	A	A	A	A	B	A	A	A'	A	E	豐	
A	B	A	A'	A'	A'	E	A	A	A	A	A	B	A	A	F	A'	F	洪	
A	B	A	A'	A'	A'	A	A	A'	G	A'	D	B'	A'	G	A'	A'	G	庚	
A	B	A	A'	A'	A'	A	A	A	A	A	A	B	A'	G	A	A	H	慶	
A ₀	B	A	A'	A'	A'	A	A	G	A _k	A _k	A _k	A	B	A'	G _k	A _k	A _k	I	淺
A	B	A	A'	A'	A'	A	A	A	A	A	A	B	A'	G	A	A'	J	馨	
A	B	K	K'	A'	A'	A	A	K	A	K	K	B'	A	A	K	K	K	K	三
D	B	A	K	A'	A'	A	A	K	A	K ₀	K	K	B	A	A	K	K	L	唐
A ₀	B	A	K	A'	A'	A	A	K	A	K	K	K _A	B	A	A	K	K	M	全
A ₀	B	A	K	A'	A'	A	A	K	A	K	K	K _A	B	A	A	K	K	N	陽
D	B	A	K	A'	A'	A	A	K	A	K ₀	K	K	B	A	A	K	K	O	和
D	B	A	K	A'	A'	E	A'	K'	A	K ₀	K	K	B	A	A	K	K	P	李
D _A	B	A	K	A'	A'	A	A	K	A	K ₀	K	K _A	B	A	A	K	K	Q	詩
田	野	野	野	野	野	野	野	野	野 ¹⁴	原	原	原	原	原	原	原	原	原 ¹⁵	
2 ₂	2 ₂	2 ₂	2 ₁	2 ₁	1 ₂	1 ₂	1 ₂	1 ₂	1 ₁	8 ₂	6 ₂	6 ₁	5 ₂	5 ₁	4 ₂	3 ₁	1 ₂		
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	漢
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	沈
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	C	成
																		D	庚
A	A	A'	A	A'	A'	A	A	A	A	E	A	A	A'	A	A	A	E	F	豐
A	A	A'	A	A'	A'	A	A	A	A	E	A	A	A	A	A	F	F	G	洪
A	A	G	A'	A'	A'	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	H	慶
A	A	A'	A	A	A'	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	I	淺
A _k	A	A'	A _k	A	A	A _k	A _k	A	A	A _k	A	A _k	A	A	A	A	A	J	馨
A	A	A'	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	K	三
K	A	A'	K	A	A'	K	K	A	A	K	K	A		A	A	A	L	唐	
K	A	A'	K	L	A'	K	K	A	L	K	A	K	K	A	L	A	L	M	全
K	A	A'	K	L	A'	K	K	A	L	K	M	K	K	A	L	A	L	N	陽
K	A	A'	K	L	A'	K	K	A	L	K	A'	K	K	A	L	A	L	O	和
K	A	A'	K	L	A'	K	K	A	L	K	A	K	K	A	P	L	A	P	李
K	A	A'	Q	L	A'	A _k	A	A _k	A _k	A	E	A	Q	A	L	A	Q	詩	

停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	沈底
仲	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	成
停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	贊
仲	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	華
停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	陽(己)
停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	張
停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	注慶長
停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	淺
停	錫瑞	玄龜	玉雞	珠鳳	草
仲	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	陽(己)
仲	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	丘
重	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	唐詩比
重	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	全唐
仲	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	陽(己)
仲	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	和
停	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	李
停	錫瑞	神龜	玉雞	丹鳳	詩解

河	河	江	江	江	江	江	江	江	海	海	海	海	海	海	道	道	道	道	道	田	田	田	田						
1,2	1	2	3	6, 1	5, 5	5, 1	4, 2	2, 3	2, 2	2, 3	6, 3	4, 2	4, 1	3, 3	3, 2	3, 1	1, 3	1, 2	8, 1	2, 3	2, 1	2, 2	1, 1	6, 2	5, 1	4, 1	3, 3		
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A
											D	A	A	A	D	D	A	A	A										
A	A	A	A	A	E	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	E	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	G	D	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	k	A	k	A	k	A	A	A	k	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	k	A	A	B	A	A	k	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	K	A	K	A	A	A	K	A	A	K	A	A	A	K	D	A	A	A	A	A	K	A	B	A	K	K	A	A	A
A	K	A	K	L	A	A	K	A	A	K	A	A	A	K	D	D	A	A	A	A	K	A	B	A	K	A	A	L	L
A	K	A	K	L	A	A	K	M	A	K	A	A	A	K	D	D	A	A	A	A	K	A	B	A	K	A	A	L	M
A	K	A	K	L	A	A	K	M	A	K	A	A	A	K	D	D	A	A	A	A	K	A	B	A	K	A	A	L	N
A	K	A	K	L	A	A	K	A	A	K	A	A	A	K	D	D	A	A	A	A	K	A	B	A	K	A	A	L	O
A	K	A	K	L	A	A	K	A	A	K	A	A	A	K	D	D	A	A	A	A	K	A	B	A	K	A	A	L	P
A	K _A	A	K	L _A	A	A _E	A _k	A	A	A	K	A	A	A	D _A	D	A	A	A	A	K _A	A	B _A	A	K _A	A	A _A	A _L	Q

和刻本『事林廣記』(元祿十二年刊)



圖內洛河出洛陽城東
 要入明心北流洛水西流
 洛水南流洛水東流洛水
 洛水西流洛水東流洛水
 洛水南流洛水東流洛水
 洛水西流洛水東流洛水
 洛水南流洛水東流洛水
 洛水西流洛水東流洛水
 洛水南流洛水東流洛水
 洛水西流洛水東流洛水
 洛水南流洛水東流洛水
 洛水西流洛水東流洛水

洛	洛	洛	洛	洛	洛	河	河	河	河	河
2,2	2,3	2, 1	4,2	3,2	3, 1	2,3	2,2	2, 1	3,2	3, 1
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
A _k	A	K	A	G	A	A	A	A	A	A
A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
M	A	K	A	G	A	A	A	A	A	A
M	A	K	A	G	A	A	A	A	A	A
M	A	K	A	G	A	A	A	A	A	A
K	A	K	A	G	P	P	P	P	P _k	K
A _k	A	K	A	G _A	A	A	A	A	A _P	K _A

李嶠百詠 慶長頃寫(内閣文庫藏)

坤儀十首

山

仙嶺帶氤氳

泉飛一道奔

古壁丹青色
已開封禪處

石

字子維城固

荒苑饒東秦

入宋星初履

原

怪目持補極

玉繁銷憂日

萃川遠綺錯

晴下樞周回

方知急難備

峽下吐翠巖

峯出半空

新花解綠文
希謁聖朝君

將軍欲羽威

字畫錦中飛

巨相逸身隊

亭後想支林

江擁赴滌年

公隄凶所眼

暮下關香田

長壘鶴錦滿

野

風去春歸血

蒼梧中乳去

屏階平厚偉

誰云報築士

道

黃鳥懷春日

杏灰鬧風吟

瑞麥兩岐秀

寧如幸生力

銅駝公筆法

鶴飛世空空

瀑度霧光通

乞明春徑紅

獨在傳荒中

浪衝作賦泉

萬葉布袍跡

素衣九種彩

擊壤自安意

叙因借吟詩

紫微三千星

玉淵塵侶雷

今日中關士

海

明火疏丹壑

三山巨壑踊

素機十二衣

余叱馬如靴

素控文可後

朝宗合紫微

夢里大鵬飛

樓閣春雲色

會當深窈窕

江

日夕三江望

霞津脚脚初

滿侶黃牛去

英靈已傑士

何

何出巖窟中

袖帶生馬類

珠合明月輝
方逐家川水

雲湖万里迴

月海傳光潤

清如白鳥來

誰識御雲才

長波接瀟空

竹箭入龍宮

陸多分年羨

若披蘭素袂

俗

光海嘉光媚

花頭丹鳳海

元禮期仙客

玄龜方賜瑞

芳草十首

榮光五色通

墨條上皂風

三川物態新

日映玉鉞津

隱玉觀羣人

綠字待未鍊

文淵閣藏四庫全書本『全唐詩』

山

地鎮標神秀一作山崩我我上翠氛泉飛一道帶峰出

半天雲古壁丹青色新花綺一作錦紋已開封禪所希

謁聖明君

欽定四庫全書

御定全唐詩
卷五十九

三

石

宗子維城固將軍飲羽威巖花鑑裏發雲葉錦中飛入

宋星初隕過湘燕早歸倘因持補極寧復想一作支機

原第五句
缺二字

王綮銷憂日江淹起恨年帶川遙綺錯分隲迴汗眠

橫周回暮苔關晋田方知急難響長在春令篇

野

鳳出秦郊迴鷄飛楚塞空蒼梧雲影去涿鹿霧光通草

暗少原綠花明入蜀紅誰云築版士猶處傳巖中

田

貢禹懷書日張衡作賦辰杏花開鳳軫莖葉布龍鱗瑞

麥兩岐秀嘉禾同穎新寧知帝王力擊壤自安貧

道

銅駝分華洛劔閣抵臨邛紫微三千里青樓十二重玉

闕塵似雪金穴馬如龍今日中衛上堯尊更可逢

海

欽定四庫全書

御定全唐詩
卷五十九

四

習坎疏丹壑朝宗合紫微三山巨鰲湧萬里一作九萬大鵬

飛樓寫春雲色珠含明月輝會因添霧露方逐衆川歸

江

日夕三江望靈潮萬里回霞津錦浪動月浦練花開滿

似黃牛去濤從白馬來英靈已傑出誰識卿雲才

河第八句
缺

源出崑崙中長波接漢空桃花來馬頰竹箭入龍宮德

水千年變榮光五色通若披蘭葉檢

洛

九洛韶光媚三川物候新花明丹鳳浦日映玉雞津元

禮期仙客陳王觀麗人神龜方錫瑞綠字重來臻